
追憶の物語

みそアイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

追憶の物語

【Nコード】

N8213L

【作者名】

みそアイス

【あらすじ】

投稿型企画小説。読者様の采配で打ち切り、継続が決定する小説です。皆さまの淡い思い出、楽しかった青春、痛い瞬間、友人談、私憤などなどetcをメッセージとして頂き、作者が短編小説にしてゆきます。*作者の文章力は皆無です。オチや山場などが無い場合、バッドエンドもありえるかもしれません。それをご理解ご利用をお願い致します。

説明*お願い！ メッセージ送る前に読んで！（前書き）

本当にお願ひします。

送らない場合は大丈夫ですが、送る場合は読んでいただかないと主旨から外れちゃう！

説明*お願い！ メッセージ送る前に読んで！

挨拶

皆さんおはようございます、こんにちは、こんばんは。

今回、とある企画『追憶の物語』を書きつづることになりました
みそアイスと申します。

と、言っても自分で企画して立てたんですが。

説明に飛びたい方は説明項目までスクロールでどうぞ。

立てた動機ですが、この『小説家になろう』と言うサイトをもつ
と活用出来ないかと思った次第です。

それでふと、僕に神の啓示（夢の中での妄想）が降って来まして、
『これやつちまえよゲへへ』と言われたので、立ちあげてみました。

どのような物かと言うと 普通に説明読んでください。と言う
か、挨拶要らないですね。神の啓示とか糞喰らえです。神死ネ！
去ネ！

なかったからやってみただけだったり。

ルール説明

追憶企画。

追憶 過ぎた時間に思いをはせること。

皆さまの淡い思い出、楽しかった青春、痛い瞬間、友人談、私憤などなどetc はたまた妄想。ぶっちゃけるとフィクションでなければ何でも。結果的に僕がフィクションにしちゃおう企画かもしれません。

そのような追憶っぽかったり、ぽくなかったりする事柄を僕が面白おかしく切なくパクリっぽく短編として書き込んでいこうと思う次第です。

望み薄ですが、もしかしたら流行るかもしれないこの企画。

『今までにあった企画とは一味違うコミュニケーションっぽさを出す』を目標に掲げてやらせていただきます。

企画なので、すべては読者様次第です。

ぶっちゃけると失敗するのわかってやってます……テヘッ

簡単な概要から説明させていただきます。

読者さんに案を貰い、それを僕が文章にしていくわけですが、あらゆることを指定していただきます。

基本自由ですが、一応テンプレを。

- ・主人公
- ・登場人物
- ・話の概要
- ・あとがき二万文字以内

以上です。

主人公名は仮名で十分です（指定が無ければこちらで決めます）。
登場人物も然り。

話の概要は、短くても詳しくてもOKです。一行でも可。その場合、僕が妄想します。妄想は爆発！ リア充爆発しろ！

あとがきは、投稿者さんの自由です。人が来るかわかりませんが、自分のHPだろうと小説ページだろうと宣伝しちゃってください。
直リンでもOK？

前書きは僕の感想と、作者さんの名前（任意）を入れます。

ちなみに、自分で小説を書いて送って来てもらえれば、それをそのまま小説として掲載いたします。

投稿者様はネタバレと成らぬようメッセージBOXによりしくおねがいします。

* 注意*

一番重要ですが、作者の文章力が皆無な点をご理解ご利用の程を。
一人称、三人称はコチラで決めさせていただきます。追憶なので、
ほぼ一人称ですが。

概要の原文も後書きにいれさせてもらいます。入れたくない場合はおっしゃってください。僕的にはいれさせてもらいたいです。

サブタイトル部分には『タイトル』+『投稿者名』を入れさせてもらいます。タイトルのご希望がありましたら、それを使用いたします。

この企画はコラボなどを募集しているわけではありません。既存の小説のキャラクターを出したい当はご遠慮お願いいたします。あくまで、『追憶の物語』です。

尚、文字数制限が四万文字なので、大作の設定や細かなストーリーを送られても対応出来ません。

何度も言いますが『追憶の物語』です。フィクションダメ！絶対！

ファンタジーやSFなどは、自分のページで掲載することをお勧めします。

アダルトサイトなどへのジャンプは張らないようお願いします。十八禁設定はダメです。

読者様の采配に委ねていますので、速攻で終わる物や、オチ、山場など皆無になるかもしれません。出来る限り起承転結は付けたいと思います。

更に、ハッピーエンド、バッドエンドも出てくるかもしれません。バッドエンドをハッピーエンドに変えたい当の設定も受け付けます。

当小説は企画型小説なので、感想の方、僕の他作品の催促などを書き込むのはおやめください。見つけ次第削除させていただきます。

投稿者様がいらっしやらない場合、ルール説明だけで終了もありえますので、そのところどうぞご了承ください。

「『オレ・私』の作品がねーぞボケ、やりにくいからってシカトすんじゃない！」とならないように、作品のまえがきに残りメッセーヂ数を記しておきます。ただ、先着順で書いて行くので、増えていると言う事もありません。その事もご了承ください。

一応どれだけ見られているか知りたい方もいらっしやるでしょうから、総合PVとユニークは次作品投稿時に書きこみます。個別PVは僕の元氣的に無理です。

これで打ち切りなんてこともありえますが、なにとぞよろしくお願いたします。

ぼくはイヌ・F I様（前書き）

どーゆうこと！ どーゆうこと！？

いえ、別にいいんですけど、本当に一行でビックリしたw

すぐにメッセージ来た事は嬉しかったけど。

しかもメッセージが『犬の気持ちになって』ってコレ何？ って最初思いました。名前は二文字だけ表示してとのことで、二つ伏せました。後、ハットエンドって何ですか！ ハッピーバットエンドってことでやってみました。

構想一分で書き始めた作品。何も知らないのに白いワンピース知っていたり、微妙だ。色が認識出来てるし。

構想より二文字伏せた理由を考えた時間の方が長かったです。

もらった追憶はあとがきに。

はっきり言って追憶でもなんでもないけどさ。

メッセージ来なかったら打ち切りになる可能性もあります。むしろ、高いです。

残り0メッセージ。

すてられて。

こんにちわ、ぼくはいぬ。
たぶんいぬなんだと思う。

何故たぶんなのかって言うと、目の前の子がいぬって言ってたから。
ら。

あれ？

でも、わんちゃんとか、しろって呼ばれたり……どれだろう。
ぼくをいぬって呼んでくれた子は、小さな女の子。しろくてもふもふしたパンをくれたから、好き。おなか減ってたから嬉しかった。
ぼくより長くて黒い毛が、強そうでうらやましいな。

小さいって言っても、ぼくよりは大きい。だけど、ここから見える人よりすごくちっちゃいから小さいのかな。

抱きしめられるとあたたかくて気持ちいい。すごくいいにおいがするんだ。同時に、さびしかったりもする。

だって、ぼくを抱きしめると、女の子が汚れちゃうんだ。
きれいな白いワンピースが、よごれちゃう。

ぼくは汚いから、さわらないで。

「きゃん、きゃん」

「え？ わ、わわ！ こらー、シロ。あばれちゃメっだよ？」

「くうーん……」

女の子はおかおの前で指をたてて、よくわからないポーズをしている。

ぼくは意味がわからなくて、首をかしげる。

ぼくが首をかしげると、女の子は『かわいいー』って言っつよく抱きしめてくれた。

でも、ちよっとイタイよ。

「どっしよう……飼いたいなあ、でも、きつとパパとママダメっついで……」

女の子は寂しそうにぼくを見つめている。

もしかしたら、ぼくのせい？ ぼくにパンをあげたから、おなかすいちゃったのかも……。

ごめんね。

ぼくは声が出せないから、困ったような顔をした女の子の頬を舐めてみた。女の子みたいに大きくなったら、しゃべれるようになるのかもしれない。

「きゃっ、もーシロ……くすぐりたい、きゃはー」

女の子がわらってくれた。舐めると笑うんだね。もっと舐めるよ。

「もー、なんでそんなにぺろぺろするのー？ うちの子になりたいのっ」

? どづいつことだろう? 女の子がジッと見てくるけど、わからない。笑顔だから、まあいいか。

「ごはんいっぱい食べれるよ?」

「ワンッ!」

ぼくは大きく鳴いた。

「ごはんっていうのは、さっきのしろくてもふもふしたパンだってわかる。さっき、女の子も言ってたし、ね。」

「そっかあ、えへへ。やっぱりダンボールの中はやだよな。よろしくね。ミキはミキって言うの。シロのお名前は?」

「フウーン」

まだしゃべれないみたい。ぼくは『いぬ』って名前だよ、ミキちゃん。

「ふーん……シロはわうーんって名前なんだ……でも、今日から『シロ』って名前ね?」

「ワンッ!」

なんと、名前が二つに増えたみたい。ちゃんと覚えておかなくちゃ。

「じゃ、おいで、シロ」

「くうーん」

ぼくは手を広げるミキちゃんを見つめる。

今ぼくが居るのは、小さなちゃんいろいろい壁にかこまれたおうち。ま

えは白かった布がしかれている。

そして、ミキちゃんは白いワンピース。ぼくのせいですこし茶色
くなっている。

もしぼくがそっちにいったら、この布みたいに、ミキちゃんも汚
れちゃうかもしれない。

「もうっ！ ほら、いくよーシロー！」

そう言って、ミキちゃんはぼくを抱き上げた。

あ、またよごれちゃうね、ミキちゃん。ごめんね、きたなくて。

でも、あたたかくてきもちいなあ。

なんだか眠くなっちゃう。おやすみ、ミキちゃん。

あたらしいおうち

「コラー！ シロく、なんでにげちゃうのー？」

いま、ぼくはミキちゃんから逃げ回っている。

ミキちゃんのおうちは、すごく大きなおうちだった。ミキちゃん
より大きい。きょうからぼくのおうち。

あと、男の人と、女の人が出た。

ミキちゃんがパパとママって言ってた。さいしょはミキちゃんを怒ってたから、ぼくがミキちゃんをまもったんだ。そしたら、ため息を吐いて『ちゃんと世話するんだぞ』って言ってた。

きつと、ぼくを怖がってちかよってこなかったんだ。やったよミキちゃん。ミキちゃんはぼくがずっと守るからね。

でも、ミキちゃんはおうちに帰ったらひどいことをした。すぐくあついお水をぼくにかけて、わらってた。

ぼくは必死に体をふってみずをとばすんだけど、ミキちゃんがどんどん水をかけてくる。

それで、何でかみきちゃんもびしょびしょになっちゃった。なんとか逃げ出したんだけど、しろい布を持っておいかけてくる。

「きやつ……」

うしろで大きな音がして、振り返ったらミキちゃんがころんてた。

「ぐすつ……シロ、なんで、ぐしゅ……」

ミキちゃんがぼくを呼んだので、ちかづいてみると、顔をくしゃくしゃにしていた。なんだか悲しそう。

だから、ぼくはミキちゃんの顔を舐めてみた。

「うくつ……シロ、くすくつたい……」

まだ舐め足りないみたい。

「きゃあ、わかった、わかったからシロ！ もうっ！」

また笑ってくれた。ぼくはミキちゃんのわらったかおのほうがいい。

でも、油断してたら捕まえられちゃった。

「ほーら、シロ！ もうぜったい逃がさないからね！ ちゃんとタオルでからだ拭いて」

身体中をごしごしとふかれて、ちょっと痛い。でも、すこし気持ちいい。

いまきづいたけど、からだがしろくなってた。ミキちゃんのワンピースと同じ。

でも、やっぱりあのお水は嫌だなあ。

「ミキー！ 廊下びしょびしょにしちゃって！ ちょっとこっち来なさい」

「わ、シロ！ ちょっとわたしの秘密の場所にかくれよ！」

とおくからママの声がするけど、ミキちゃんはボクを抱いてぎゅ方向に走った。

それで、なんだかくらい場所に入ったみたい。

ぼくはミキちゃんに抱かれて、タオルで拭かれている。

「シロー、ここはミキの秘密の場所だから、ぜったいシーだからね？ シロとミキだけの秘密」

ミキちゃんはにこにこしているけど、壁のむこうに誰がいるよ？

あ、でもため息をついて行っちゃった。ばれなかったのかな。

『今日だけだからね』って言ってたけど。

「シロは真っ白でわたあめみたい……うーん、はむっ」
「キャンっ!？」

ミキちゃんがぼくの耳に噛みついてきた。というか痛い痛い！
ああ、そっか。

噛まれると痛いんだね。ぼくも噛む時は気を付けないと。ミキちゃん
は噛んでるし、噛むだけなら遊びなのかな。ミキちゃんうれし
そうだし。

それにしても……痛いなあ。

きちゃんぶ

今日はミキちゃんとママ、パパできちゃんぶって言う場所に来てい
る。

だんだんとミキちゃんの言ってる事もわかるようになってきた。

「おーい、ミキ。父さんはテントたてちゃうから、シロと遊んでき
たらどうだ？」

「はーい、行こう！ シロー！」

「ワンッ！」

ミキちゃんが走って行く方法に、ぼくも走ってゆく。
なんだか足元が石ばっかりで走りにくい。でも、おうちの床より
いいかも。あれはすべっちゃうからね。

あと、ミキちゃんが少し大きくなった。ぼくも少しおおきくなっ
たかな。

ミキちゃんの膝くらいだけど。

「シロ、見て！ ほら、ここ、おたまじゃくしいっぱい！」

ミキちゃんが座りこんでいたので、ぼくもそこを覗いてみる。

そこには、うねうねした黒いのがいっぱい。なんだかきもちわる
い。

もしこれがごはんだったら、ぼくは食べたくない。

「シロのごはん！」

……どうやらごはんみたい。

ミキちゃんはこのこにこしてるし、きつとがんばってここに集めて
くれたのかも。まえにミキちゃんが作ってくれたごはんたべなかつ
たら、悲しそうな顔してた。ミキちゃんというなら……ぼくは……。

ぼくがかおを近づけても、それはうねうねしていた。

きもちわるい。

目つむれば……。

食べれるっ！

「わっ、シロ！ うそだよ、うそっ！ ちゃんとシロのごはんも持
ってきてるから！ 食べちゃメっ！」

ミキちゃんがあわてて体をひっぱってくるけど、何個かのみこん
じやった……。きもちわるい。

体の中でうねうね。まずいし、きもちわるい。

「もー、シロはくいしんぼうなんだから……」

「うはんって……。うはんって……」。

「ワンッ！」

「いたいっ！ いたいってシロ！ そんなおこらなくてもいいでし
よ！」

「ワンワンッ！」

うにようによの仇！

でも、ちゃんとよわく噛んでるよ？ ミキちゃんも笑ってくれて
る。

「はあ、はあ……帰ったらジャーキーあげるから、許して」

「くうーん」

ジャーキーおいしいから許すよ。あれのためならいくらでも舐め
るよ。

「シロはほんとにジャーキー好きだねえ。食べたけどまずかったよ」

前にミキちゃんがぼくの目の前で食べちゃったんだ。『おいしい
の？』って言うって。でも、すぐにペってしちゃって、もったいない
からぼくが食べてあげた。

「そっだ、シロー！ いぬはおさかな取ってきたり出来るらしいよ？

シロもとれる?」

お魚……あのいつぱいあるお水の中から……。

「くうーんくうーん」

無理、死んじゃう。お水いつぱい。

「やっぱりシロには無理かー。ちっちゃいもん」

む、ぼくだってやれば……やれば……。
ていつ!

「ま、まってシロ! だからうそだって、うそだよシロ!」

お水に飛び込んだぼくを、ミキちゃんが走って来て抱き上げてくれた。

でも、ゆるさない。

「わ、いたいたい! わかった! ジャーキーあげるから!」
「わんっ!」

ゆるすよ。

それより、ミキちゃんがびしょびしょになっちゃった。またママに怒られちゃっつよ?

「どつせだから、川で遊ぼうか? もう濡れちゃったし?」
「わんっ!」

ミキちゃんがぼくをおろし、ぼくは川をかけまわる。

さつき入ったけど、なんともなかったから。

「そんなにあわてると、きゅっ」

あ、またミキちゃんが転んじゃった。

また泣いちゃう。

そう思って、近づくんだけど　　なんかすごくこわい笑みをうかべていた。

「やったなー、シロ！　シロもびしょびしょにするもん！」

いっばいお水をかけられた。だから、ぼくもしかえしにいっばいかけた。

ぼくもミキちゃんもびちょびちょになったけど、楽しかったな。

そのあと、ぼくとミキちゃんはママに怒られちゃったけど……。

おかしい

僕がミキちゃんのお家に来てかなり立つけど、なんだか最近はお

かしい。

前までは皆仲がよかったのに、最近は会話がない。

僕はミキちゃんとしか話してないかなあ。

今も、ミキちゃんに抱きつかれ、秘密の場所にいる。

ミキちゃんは震えていて、泣きそう。舐めても、全然笑ってくれない。

なんだか寂しい。

「今日は仕事みつかったの！」

「……いや、探してるんだが」

「毎日毎日探してる探してるって、公園で時間でも潰してるんじゃないの。アナタがリストラされてから私がどれだけ苦労してるか知ってる！？ ご近所さんにだって顔向けできないじゃない！」

「そこまで言うことないだろ！ 俺だって頑張ってたよ！ 今は不景気でこんだから、なかなか見つからないんだ！ お前だって遊んでないで働けばいいだろ！ 主婦だってパートやってる奴いっぱいいる」

「私は家事で忙しいのよ！ ほんと情けない。そんなだからリストラされるのよ。ローンだってまだ残ってるのに。これからどうやって生きて行けばいいんだか」

また始まった。

最近こんなのばかり。

これのせいでミキちゃんが震えてるのはわかってる。

前にパパとママも舐めてみたんだけど、笑ってはくれなかった。

パパは散歩に連れて行ってくれたけど、ママはぼくを叩いてきた。

「ツツ……シロ」

ミキちゃんの頬を舐めてあげる。

僕にはこれくらいしか出来ないから。
「ごめんね、ミキちゃん。僕がもっと大きくなって、喋れるようになっただけだよ。」

浮気

どうしよう……最近ミキちゃんが全然笑ってくれない。
学校から帰ってくると、すぐに僕を散歩に連れて行ってくれる。
それは嬉しいんだけど、すぐ帰るのが遅い。
ジッと公園のイスに座って、僕を撫でているんだ。学校であった
事とか話してくれる。だけど、パパとママの話はしない。

だって、家に帰るといつも喧嘩しているから。
いまも、

「どういうことだ！ あの男はだれなんだ！」
「知り合いよ、知り合い！ 私の友達関係をアナタに指図される覚えはないわ！」
「俺が必死で仕事してる間にお前は男作って遊んでるのか！」
「だったらちゃんとした仕事につきなさいよ！ 結局見つかるまで見つかるまでずっと工事のアルバイトじゃない！」
「生活費は入れてるだろ！ わかった、もういい。お前がそんな奴

だとは思ってなかった」

「私だっと思って思わなかったわよ。アナタがそんなに適当な人だなんてもう終わりね」

そこで、ミキちゃんが泣き出した。声を殺して、ぼろぼろと涙を舐めても舐めても、目から涙が出てくる。すごくしょっぱい。

「シロ……終わっちゃうのかな。パパもママも……これで「くうーん」

わからない。何が終わってしまうのかもわからない。でも、ミキちゃんが苦しんでるって事はわかる。

僕はミキちゃんから離れ、リードを啜えて戻ってくる。

「シロ、散歩いきたいの……？」

「わふ」

「……そうだね、いいっか」

のそのそと立ちあがるミキちゃんを引っ張って、僕は歩きだす。パパとママの所へ。

「シロ……？」

ミキちゃんをぐいぐいひっぱり、あそこへ。

もういちど、昔のように。

「ミキ……か。向こうに行ってなさい。父さんと母さんは大事な話があるからな」

「そつよ、これからのミキにも関わるか」

「散歩……」

『え？』

ミキちゃんはぎゅっと僕のリードを両手でつかみ、唇を噛みしめている。

「散歩……一緒に、行きたい、な」

「わんっ！」

『……』

僕の頭にミキちゃんの涙がこぼれおちる。
涙が……。

僕はパパとママの周りをまわり、ミキちゃんの所に戻る。
リードの輪の中に入った二人は、だんだんと距離を縮める。
でも、結局またがれ、外に出てしまった。
もう一緒にはいられないの？

「はあ……、散歩いくか」

『……そうね』

パアっと、ミキちゃんの顔が明るくなり、笑顔を浮かべる。
本当にひさしぶりの、笑顔。

よかったね、ミキちゃん。

最後の散歩。

久々に皆での散歩。僕のリードはパパが持つてる。

ミキちゃんも嬉しそうで、にこにこしている。

前に皆で行った時とは随分違う。

前は僕もミキちゃんも小さかったけど、今では大きくなっている。

ミキちゃんは制服と言う白と黒の洋服を着るようになったし、僕はミキちゃんの膝より少しだけ高いくらいの大きさになった。

ミキちゃんより大きくなったら、もっと守りやすくなるんだけど、まだまだ大きくなれないみたい。

もう少し大きくなったら喋れるようになるかな。

「パパ、ママ、何処に行きたい？ わたし、最近色々な所にシロと散歩に行ってるから、結構詳しいんだー」

ミキちゃんの言葉に、パパとママは苦笑を浮かべていた。

僕も詳しいから、色々連れて行けると思う。それに、強くなった。前にミキちゃんに近づいてきた太った男の人に噛みついたし。

「あ、ああ。そうだなあ……ミキの好きなところでいいぞ」

「それよりミキ。あなたはパパとママどっちが好き？」

「おい！ ミキの前でそれはないだろ！？」

「どっちにしる決めなきゃいけない事なのよ！ 早くても遅くても

変わらないわ」

「それだつて時と場があるだろ!？」

「そんなことばかり行つてるからアナタは機を逃すのよ!」

「まただ……。」

せつかくミキちゃんが嬉しそうにしてたのに、そんな事言つちやつたら、また泣いちゃう。

「で、ミキはどっちがいいの?」

「……パパ」

「お、そうか。なら」

「と、ママ」

『……』

ミキちゃんの付言で、パパとママは黙りこんでしまった。

「どっちかなのよ。どっちが好き?」

「……」

ミキちゃんは俯いたまま、声を出さない。

「ミキ?」

「そんなのツ!」

顔を上げたミキちゃんの顔は、涙でぐしゃぐしゃだった。

どうしたの? 誰がミキちゃんを虐めたの? 僕がミキちゃんを守るから。

「そんなの決められるわけ……ない、よ。パパもママも、大好きだもん! どっちかなんて、決められない!」

『…………』
「だったら……、だったら、わたしはシロといる。シロとずっと一緒にいる。パパもママもいらさない！ 酷い事ばかり言って、わたしの事嫌ってるもん！」

僕にミキちゃんが抱きついてきた。

僕はミキちゃんの頬を舐める。僕はずっと一緒にいるから。それにしても、涙が前よりもしょっぱい。

「ミキ、ママ達を困らせないで。大事なことなのよ」

「いや、キライ！ ママもパパもキライっ！」

「あ、おい！ ミキっ！」

ミキちゃんは泣きながら走って行ってしまった。

僕もミキちゃんに向かって走る。

リードは強く握られていなかったの、すぐに振り切る事が出来た。

後ろでパパやママが叫んでるけど、ミキちゃんを泣かせるパパやママなんて嫌いだ。

「ミキ！ 止まれ！ 赤信号だ！」

「え？ きゃっ」

あ、ごめんミキちゃん急に止まるからぶつかっちゃ

キキイイイ！

あれ？ ミキちゃんって意外に硬いね。
僕、お空飛んでる？ 大きくなれたのかな？

「え、あ……シロ！ シロおッ！」

「ごめんミキちゃん……だって急にとまるから、ぶつかっちゃって。
でも、あんまり心配かけないでね。僕がいつでもミキちゃんを守
ってあげるから。ずっと一緒に居てあげるから。」

さびしくない、よね？

トサッ

あれ、ここはどこだろう。

真っ暗。

またミキちゃんの秘密の場所かな。

また嫌なことがあったの？ ミキちゃん。

舐めてあげるから、笑って。

「……」

声が出ないや。

そういえば、風邪引くと声がでなくなるんだっけ。ミキちゃんに
うつらければいいなあ。

体は、動くかな？

「……え？ シロ、シロ！ 起きたの？ シロッ！」

うん、起きたけど、風邪ひいちゃったみたい。

ごめんね、ミキちゃん。治ったら、またお散歩行こうね。

「しろお……ぐしゅ、う、ぐすん」

またミキちゃんが泣いてる。

風邪が治ったら、パパとママに嘔みついてやるづ。

加減すれば、怒られないよね？

「ミキ……シロに、お別れを」

「イヤッ！ ずっと一緒にいるんだもん！ シロはわたしがおばあちゃんになるまでずっと一緒にいるんだから！」

「ミキ……」

うん。

僕はずっと一緒に居るから、泣かなくていいよ。これからもずっとミキちゃんと、楽しいことやおいしいもの食べたい。

ああ、ジャーキーが食べたい。

でも、今はすごく眠いなあ。

「ミキ、シロはもう起きないと言われた。それでも、ミキの為に起きたんだ。奇跡の様な事なんだ。助けてくれたお礼を言わなくていいの？」

「うん……しろ。ありがとう……だずけでぐえて。ずっと、ずっと一緒に……」

泣かないで、ミキちゃん。

僕がミキちゃんが守るのは、当たり前だから。

幸せをくれたミキちゃんが、何よりも大事だから。

「居て、ぐれて……ありがとう」

「シロ。ありがとう……そして、すまない」

「私からもありがとう、そしてごめんなさい。あの、ね。私達、私の実家の畑を継ぐことにしたの……家族仲良く、田舎で暮らそうって。全部シロのおかげ、そしてシロも一緒に……うう、ごめん、ね、ごめんなさい」

よかったね、ミキちゃん。

これからは泣かなくていいね。最後の涙は、僕が舐めてあげるから。

きつと、向こうは知らない物がたくさんあるんだろっね。
楽しそうだなあ。

あれ？　これがミキちゃんの頬かな。しよっぱくはないけど、きつとそうだね。

見えないけど、わかるよ。

しよっぱくはないのは、もう寂しくないからかな？

「シロ？　シロっ！？　起きたの？　一緒に行こう。それで、また川で遊ぼう。今度は意地悪もしないから、ジャーキーもおなかいっぱい食べさせてあげるから、ね？」

「先生を呼んでこよう！」

「ええ！」

うん。いっぱい遊ぼう。ジャーキーも楽しみ。

それにしても、眠いなあ。

すこし眠るね。

起きたら、また皆でお散歩行こうか、ミキちゃん。

……おやす、み。

ぼくはイヌ・F I様（後書き）

犬の気持ちになって、ハットエンド。

小説は書いていないので、URLとかはありません。
後、名前の所を二文字伏せてもらえると嬉しいです。

三色のバラ・c a I m様(前書き)

はっちゃんけました。以上です。

何でこうなった？ 本当にごめんなさい。

なんかそのまま書いても良いですが、山無しオチなしになりそうで、仕方なくこんな感じになっちゃって。

一応恋愛です。うそ、ホラーです。

怖くなくするように、恋愛？

いまいちな出来ですけど。ごめんね。

てか設定変わってる感じ？ 寝ぼけてるって設定どこいつちゃったの！ すごい難しかったです。

構想一時間。正確には、犬の散歩に行つて考え始め、忘れてて最後らへんで思い出した。時間的には五分くらい。

自分ならどんな物語にするとか考えると面白いかもw

文章家のテストみたいで。

残りメッセージ二通。

ツてまっつて、追憶全然関係ない話送ってませんか!?

実話の跡形も無いんですが!？ ファンタジーとかSFじゃないですか!？ 設定すごい詳しいんですが、短編無理ですから！

つてことで一通(´・`・´・´)

次の奴、めちゃくちやすごい来ました。これぞ追憶って言うの。もう本気で気合入れないとヤバイ。もし変なものになったら、送ってくれた人に土下座して謝るしかありません。だから頑張ります。

三色のバラ・c a I m様

集まり

「で、次お前だぞ？ ちゃんと用意してきたか？」

「あんまり自信ないけど、じゃあ、僕の実話で」

「いやいや、無理だろ！？ 百物語で実話なんて！」

「うーん、出来ると思うよ？」

場所は、少年の家。

現在少年達は、夏と言う事で百物語大会という物を開催していた。

メンバーは少年を含めて、男の子四人、女の子三人。

中学二年生としては、めずらしく男女で仲が良い。と言うのも、

家が近所で小さな頃から遊んでいたからだろう。

百物語と言えはろうそくだが、少年達は豆電球だけを付け、行っていた。

話す内容は、本当にくだらない、インターネットで見つけたようなものばかり。しかも、最終的なオチが、毎回大声を出して驚かす物ばかり。そろそろ皆飽きてきたところだ。

まだ二物語程度だろう。次で三話目。

「ねえ、飽きちゃったから次で終わりにしない？」

「あー、そうだな。俺も飽きた。どうせ泊まりだし、徹夜でゲームとかどうよ？ 俺、Wiiのコントローラ持ってきたし」

「やった！ 丁度やりたいのあったの！ さっきから気になってて」

そう言っつて、女の子は部屋の隅に在るWiiを見つめた。

「お前の家はいいよなあ、金持ちで」

「そう？ そんなことないよ？」

「何言っつてんだよ。ソフトなんて全部持つてるし、母さんもお前の家は金もちだつて言っつてたぞ？ 一生遊んで暮らしてもおつりが来るっつて」

「んー、どうだろう？ じゃあ、僕のお話が終わったら、どうやったらお金持ちになれるか教えてあげる。結構簡単なんだよ？」

「お、マジか！ そしたらゲームもお菓子も買い放題じゃん！」

「あはは、そうだねー。あたしも洋服とかほしいかなあ」

もちろん、男の子も女の子も信じてはいなかった。

確かに少年の家はお金持ちだ。だが、そんな簡単にお金が手に入る事が無いと、中学生でもわかってる。

「よし！ じゃあ、さっさと始めちまうか！ お金持ちになれなかつたら全員にアイス奢れよ！」

「えー、もう。わかつたよ。なれなかつたらね！」

少年はよほど自信があるのか、嫌々了承した。

きつとお母さんの手伝いだらうと、男の子や女の子は思い、笑みを零す。

「じゃあ、話し始めるからね」

少年が皆を見回し、頷いたのを確認してから、ぽつりぽつりと話し始める。

「あれは、僕が小学生低学年の時だったかな」

少年の夢

最近、僕は変な夢を毎日見る。

別に怖い夢とかじゃなく、むしろ逆。すごくあたたかくて、優しい夢。

夢の中には、いつも一人のお姉さんが出て来る。

真っ赤なドレスを来た、すごくキレイなお姉さん。真っ黒な髪が

腰まである程長くて、本当に優しいお姉さん。

その日の夢も、僕はお姉さんと遊んでいた。

「ねえ、君は夢とかある？」

お姉さんが僕に花冠を作りながら、口を開いた。
僕は、お姉さんの膝枕で、横になっていたんだ。

「うーん、夢は……サッカー選手？」

「ふふ、疑問形なんだ」

「だって、まだ小さいし、よくわからないもん。もっとおっきくなつたら、夢も出来るよ」

「そっかー。叶うといいね、夢」

「うん！」

お姉さんは優しく僕の髪を撫でてくれる。気持ちよくて、いつも僕は此処で寝てしまう。そうすると、目が覚めるんだ。

「あ、一個ある」

「え？」

お姉さんはやさしく笑みを浮かべ、首を傾げた。

「えっとね、僕、お姉さんのお嫁さんになる！」

「……ふふ、楽しみだなあ。でも、男の子だからお婿さんだよ。わたしをもらってくれるの？」

「うん！ お姉さん大好きだから！」

「そっかあ。わたしも君が大好きだよ。両想いだね」

「りょう、おもしろい？」

「ふふふ、まだ難しいかな」
「うー、そんなことないもん！」

僕が頬を膨らませていると、お姉さんはくすくすと笑い、僕の頭に花冠を乗せてくれた。

お姉さんもお花もすごくいいにおいがして、僕は本当に嬉しかったんだ。

それに、いつもよりお姉さんと長く居られたから。

「あ、でも……最近、僕風邪ひいちゃったんだ。なかなか治らなくて……お母さんも治らなくて、おいしゃさんにいるの。お姉さんに会ってもうつしちゃう」

僕がしょんぼりとうなだれていると、お姉さんは『大丈夫』と言ってくれた。

「わたしが治してあげるから、ね。だってわたしは、君が好きだから」

「えへー、ありがとう、お姉さん。でも、此処に居ると本当に治ったみたいに身体が軽い」

「そうね。夢だもんね」

「夢だから、ね」

僕とお姉さんはくすくすと笑い合う。

そこで、だんだんともやががかかって来たように、お姉さんが見えなくなってきた。

僕はこれを知っている。だって、いつもの事だから。

「あーあ、お別れだね」

「そうだね。またいらっしやい。わたしはいつも此処に居るから。」

「なんたつて、君の将来のお嫁さんだからね」
「うん！ また、ね……おねえ」

病院

「おーい、早く行くぞー！ お母さんの所行くんだろ？」
「うん！ 待ってお父さん、今用意してるから！」

今日は週に一度のお母さんのお見舞いの日。一週間に一回しか会えないのは残念だけど、この日はいつも楽しみ。
早くお母さんの風邪が治ればいいなあ。

それからお父さんと車に乗って移動なんだけど、お父さんはずっとごほうごほつて、咳をしていた。僕もするけど、お父さんはすごいっばいする。

お母さんと同じくらいしてる。でも、会社を休まないお父さんは立派だと思う。前に何でそんなに頑張れるのって聞いたら、『お母さんとお前の為なら、お父さんはなんだって出来ちゃうぞ』と言っていた。

本当に自慢のお父さん。

病院につくと、僕は一直線にお母さんの部屋を目指す。

お父さんに走るなって注意されちゃったけど、早く会いたいから！

「お母さん！ きたよー！」

僕は横に動くドアを開け、中に入る。

なんでも、げんいんふめいとかで、個室らしい。だから、僕は大声を出せるんだ。

「あら、来てくれたの？ じほつじほつ……いらっしやい」

お母さんは笑顔だけど、苦しそう。前より痩せちゃって、顔色も悪い。

僕はお母さんのそばに移動し、心配そうに顔を覗き込む。

「だいじょうぶ、お母さん？」

「うん！ お見舞いに来てくれたから、風邪なんて吹っ飛んじやうわ」

「やった！」

僕がぴよんぴよんとび跳ねていると、後ろからお父さんに抱きかかえられちゃった。

「こーら。あんまりあばれちゃダメだぞ？」

「うー。だって、嬉しいんだもん！」

「それでも、な」

「わかったよー」

お母さんとお父さんは顔を見合わせて、笑っていた。僕はお母さんが笑顔になってくれて、本当に嬉しい。

「それで、どうだった？」

お父さんが真剣な顔で、お母さんに問いかけた。

「検査してもわからないって。でも、風邪で半年も入院はないはずだって」

「そう……か」

お父さんとお母さんは暗く俯いている。なんだか、元気がなさそう。

やっぱりお母さんはまだ退院できないのかな？

「あなた、お金とか大丈夫？ 私、保険入って無かったから……」
「心配するな。この前昇進してな。先任の上司が亡くなられたらしい。いい年だったが、本当にいい人だな。悔やみきれない」

お父さんは唇を噛みしめ、本当につらそうにしている。

可哀そうだから、僕がベットのの上に乗って、頭を撫でてあげた。お姉さんにやってもらつと、すごい気持ちいいから。

お父さんも笑顔になったから、よかった。

「そう、本当だったら私もお葬式出ればよかったんだけど、げほつごほつ、こんな状態だから……」

「おいおい、部下の妻が出席するなんてないぞ？」

「ふふ、だってあなたがお世話になった人でしょ？ それだったら、私の上司も同じよ」

ほんとうにおかしそうにお父さんとお母さんは笑っていた。

なんだか、ずるい。僕もお母さんとおしゃべりしたいのに！

「もー！ 僕もお母さんと話す！」

「そうね、学校はどう？」

「あのね、あのね」

それから僕は、学校で会った面白かった事や、楽しかった事を喋り続けた。

お母さんはずっと笑顔で、僕の話聞いてくれている。

「そろそろ帰ろうか？」

「あら、もうこんな時間」

「えー、もつとお話したいよー」

「ダメ。また来週くるからな？ 今日のご飯でも食べて帰ろうか？ お前が風邪ひいたらお母さん悲しむから、栄養とらないとな」

「むー、わかったよ……またね、お母さん！」

「んふ、またね」

お母さんは終始笑顔だった。

でも、僕がドアを閉める瞬間、すごい咳をしていた。あと、ゴミ箱に入ってた赤いティッシュはなんだろう？ 鼻血出ちゃったのかな？

少年の夢

「こんにちは、また来たよ」

僕はまたあの夢を見ていた。
いつものように、お姉さんに駆けてゆく。

「あ、いらつしゃい……」

でも、なんだか今日はお姉さんの元気がなかった。
なんでだろう？ いつも笑顔なのに、今日は元気が無い。

「どうしたの？ どこか体痛いの？」

「んーん、ちょっと、ね。そういえば、今日はお母さんにあったんだよね？ またそのお話聞かせて」

「うん！ えーとね、お母さんと学校のお話とかしたの！ 笑顔で、元気そうだった！」

「……そう」

お姉さんはやっぱり元気が無さそうだ。

元気にしてあげたいな。

お姉さんは地面に生えた一つの花を取って、臭いをかいでいる。きつと、いいにおいなんだろうな。もしかしたら、お花の臭いで元気になるのかも？

「お母さんの風邪はよくなったの？」

「まだ治って無いけど、もうすぐよくなるからって言ってた。僕もお母さんの為に何かしてあげられればいいんだけど……」

僕は会いに行くくらいしか出来ないから、お医者さんに頑張ってもらわないと。この前お医者さんをお願いしたら、頑張るって言うてたから大丈夫だと思っけど。

「じゃあ、してあげる？」

「え？」

僕が顔を上げると、お姉さんは僕の胸元に、黒いお花を入れてくれた。

すごく綺麗なお花。

「それは黒百合。花言葉は『好き』ってことよ。わたしは君が好きだから、ね」

「えへへ、僕も好きだから、くるゆりあげる！」

僕もあげようと思って探すけど、どこにもない。

もしかしたら、これが最後の一本だったのかも……。

「お母さんを助けてあげよっか。わたしも君の悲しむ顔はみたくないもん。一緒にがんばろう?」

「うん! 僕、頑張るよ! それで、お母さんの風邪が治ったら、お姉さんとお母さんと一緒に遊ぶんだ!」

「そっかあ、楽しみ、ふふ」

お姉さんはいつもの笑顔で、僕の頭を撫でてくれた。
あつたかくて、気持ちいい。

「ねえ、じゃあ、わたしとお花探そうか?」

「え? でも、此処にはいっぱいおはながあるよ?」

僕は両手を広げて辺りを見回す。周りは全部お花で、キレイな場所。
チヨウチヨウが嬉しそうに飛んでいる。

でも、お姉さんは首を横に振った。

「此処にはないの。青いバラと、黄色いバラ、黒赤色のバラがほしいの。病気がなおるおまじない」

「え! それがあれば、お母さんの病気もなおるの!?」

「うん!」

「だったら、僕探すよ! 何処に在るの?」

「えっとね。君は小学校に行ってるんだよね?」

「うん!」

ちゃんと毎日行ってるよ。だって、家に居てもつまらないし、お母さんに学校での事教えないといけないから。

「学校に行く途中にね。青いバラ、黄色いバラ、黒赤色のバラが置いてあるから、持ってきてほしいの。わたしは学校で待ってるから」
「え？ お姉さんに会えるの！？ 行く！ 明日の朝一番に行く！」

僕が答えると、お姉さんはもう一度首を横に振った。

「わたしは日の光に弱くて、夜しかお出かけ出来ないの。だから、今から来れない？ もちろん、会うことはわたしと君だけの秘密」
「でも……お父さんに夜外にいつちゃダメって……」

お姉さんは悲しそうな顔になっちゃった。

そっか、お姉さんも僕に会いたいけど、夜しかダメなんだ。

うん。少しくらいなら大丈夫だよね。

「わかった！ 学校に行くよ！」

「そう、ありがとう。ちゃんとお花も忘れないでね？」

「うん！ 青いバラと、黄色いバラ、黒赤色のバラだよね！」

「ふふ、そうだね。じゃ、待ってるからね」

「また後でね、お姉さん！」

そこで、僕の視界が白くなってゆく。

いつもは寂しいけど、お姉さんと会えるんだから、今日は寂しくないよ！

バラ

僕はお姉さんの言った通り、家から出た。ちゃんと、お父さんにバレないように、リビングの窓からこっそりと。

夜はすごい。

初めてみたけど、世界が違うみたいキラキラしてる。

赤や緑、青、黄色の光が輝いてて、すごいわくわくする。同時に、ちよつと緊張しちゃう。

って、だめだめ。お姉さんとの約束だから、バラ探さないで。

でも、ずつと歩いてるけど、全然みつからない。普通のバラも見つからない。もしかしたら、まだ咲いてないのかもしれない。

そのまま学校についてしまったけど、お姉さんはいなかった。

やっぱり、バラがないと会えないのかな？

花が大好きなお姉さんだもん。

僕はもう一度戻り、今度は違う道を歩いてみる。こっちは道は危ないからって、学校で禁止されてる。

暗くて怖いけど、僕も男の子だから、これくらいへっちゃら。

歩道橋をのぼると、なんだかたくさんお花が咲いていた。
お菓子とかジュースもあった。

「あ、黄色いバラ！」

僕は興奮して、そのバラを引き抜いた。

「危ない、最後の一本」

でも、花瓶にささってて、咲いていると言うより、置いてあるだけだった。他にもいっぱいお花はあるから、一本くらい大丈夫だよ
ね？

棘がついてなくて、痛くないからよかった。

そこで、写真が置いてある事に気がついた。

僕と同じくらいの、可愛い女の子の写真。

もしかしたら、この子が黄色いバラを置いて行ったのかも。

「あ、そうだ！」

僕はポケットからチョコレートを取り出し、そこに置いた。

冒険にはお菓子が必要だから、持ってきてたんだ。バラの変わりに、これを置いておこう。きっと女の子なら、チョコレートの方が喜ぶよね！僕はバラよりチョコレートがいいもん。

その場を後にし、更に僕は歩き出す。

次のバラを見つけないと。

でも、なんか冒険みたいでちょっと楽しい。宝探し見たい。

学校への道を歩いて行くと、途中の道路でまた花が咲いていた。

「今回はすぐみつかった！ 青いバラ！」

僕はそれを引き抜き、黄色いバラと一緒に持つ。

また花瓶にささっていた。違うところは、写真がお母さんくらいの年齢の女の人だった。なんとなく、さっきの女の子が成長したら、こうなりそう。

キレイな女の人だなあ。

とりあえず、何か置いて行かないと。今度はビスケットでいいかな。

多分もう一回あるだろうから、最後のゼリーをあげよう。お姉さんあげる分がなくなっちゃうけど……仕方ないよね。今度違う物あげればいいか。

ビスケットを置き、僕は次のバラを見つけに行く。

今度は黒赤色のバラ。

そう言えば、黒赤ってどんな色だろ？

それから、結構探してみたけど、全然みつからない。戻ったり進んだりしてみたけど、お花は何処にも咲いていなかった。

仕方ないから、二本だけ持って学校に向かう。お姉さんがこれでお慢してくれればいいけど。

学校に付くと、校門前に誰かが居た。
近づいてみると、

「お姉さん！」

僕は走りだし、お姉さんに抱きついた。

ああ、夢と同じで、いいにおい。本当にお姉さんはお花が好きなんだ。

でも、今日のお姉さんのドレスは、黒いドレスだった。キレイだからいいけど。

「ふふ、こんばんわ。バラは見つかった？」

「うーん、黄色と青だけ。黒赤って言うのがなかった」

僕が『ごめんなさい』と言うと、お姉さんは笑ってくれた。

「ほら」

「え？」

お姉さんが指さした方向には、お花がたくさん咲いていた。
校門から少し離れた家の間。

「あ！ 黒赤色のバラ！」

僕は駆けだし、そのバラを手取る。

黒赤色って言うのは、黒いけど、中が赤くなっているバラだった。
そして、近くの写真を見てみる。

「あれ？ この人見たことある」

写真には、男の人が写っていた。
確か、お父さんと一緒に行ったお葬式で、同じ写真を
っと、忘れるとこだった。ゼリーを置いてっと。

僕が三本のバラを持ってお姉さんの元に戻ると、お姉さんは笑っ
ていた。

なんだか僕も嬉しくなっちゃう。

「見つけたよ！ 三本のバラ！」

「うん。偉いね。きつと、これでお母さんも治るね！」

「うん！」

僕はバラを抱きしめ、笑顔を浮かべる。お姉さんも笑顔で、嬉し
そうだった。

「ちょっと貸して貰っていい」

「うん、いいよ？」

お姉さんが手を出してきたので、その掌上に三本のバラを乗せ
る。

すると、三本のバラが淡く光り出した。

「わー、お姉さんって手品出来るの？」

「ふふ、そうね」

本当にすごいお姉さん。キレイで、おまけにすごい手品も出来る。
優しいし、良い人。

「そろそろいいんじゃない？ ん？ そっか。仕方ないよね」

「どうしたの？」

お姉さんは一人で、誰かと会話してるみたい。もしかしたら、お花と会話出来るのかも。お姉さんなら出来てもおかしくないよね。バラみたいにキレイだもん。

「お花がね、お母さんの病気治してくれるって」

「わー、ほんと!？」

「うん！」

僕は嬉しくて、お姉さんの手をとってぴょんぴょんと跳ねた。お姉さんも笑ってくれて、嬉しい。

「えつとね、青いバラをお母さんの部屋に飾るといいんだって」

「あれ？ 三本じゃないの？」

「うん。黄色いバラは君が持つ。お母さんに気持ち伝わるように」

「そっか！ うん！ 僕、お母さんが治るように一生懸命気持ちを伝えるよ！」

「ふふ、そうね」

僕は二本のバラを受け取り、笑顔を浮かべた。

これでお母さんが治るんだ。本当にいいお姉さんだった！

「あれ、でも黒赤色のバラは？」

「……」

お姉さんは黙りこんでしまった。僕、変な事言っちゃったかな？

「そう、ね……これは、お父さんのお部屋。お父さん」に「気持が伝わるようにって。そうすれば、お父さんは『風邪ではなくなる』わ」

「そっか！ お父さんも風邪ひいてたから、皆治るといいね！」

「君はもう治ったでしょ？」

「あれ……ほんとだ！ いつのまにか喉も痛くない！ すごいすごい！ お姉さんのおかげだ！」

「ふふ、ありがとう」

一体どうやったのかわからないけど、お姉さんは不思議な力があるのかもしれない。だって、お花とおしゃべり出来るくらいだもんね。

「あ、あとこれ」

お姉さんはドレスの中から、一本のお花を取り出し、僕にくれた。夢の中で見た、黒百合。たしか、『好き』って意味のお花。

「ありがとう！ またもらっちゃった！」

「うん、わたしは君が大好きだから、ね。ずっと、持ってたね。約束」

「うん！」

僕は大切に黒百合を握り、反対の手で小指をつきだす。

「ん？」

「約束。小指と小指をつなげるの」

お姉さんはわからないみたい。やっぱり夜だけしか出れないからかな。

恐る恐る、お姉さんは僕の小指、自分の小指を繋げた。

「嘘ついたらハリセンボンのーます、指切った！」

お姉さんはきょとんとしていたが、くすくすと笑って、指を切った。

「これで、嘘ついたらだめなんだよ？」

「くすつ、でも、一方的な約束だよ？」

「うん！ お姉さんが好きだから、ずっと持つてるって約束したの！」

「そっか、ありがとう」

お姉さんは僕に背を向け、学校の中に向かってしまった。

僕も後を追いかけてよと思ったんだけど、

「そろそろ、お父さん起きちゃうんじゃない？ 夢の中での約束は

破られちゃうのかなー。わたしと君だけの約束」

「わわ、破らないよ！ そうだね、起きちゃう。また、会える？」

僕は不安だった。もう会えないかもしれないって。夢の中より、こうやってちゃんと会いたいな。

お姉さんは笑みを浮かべ、こちらを振り返った。

「会えるよ。今度はいつでも。ずっと一緒にいる約束のお花でしょ？」

うん、好きってことはずっと一緒に居るってことだよね。だったら、また会える。

「うん！ またね！」

「うん、また今度ね」

僕はお姉さんに背を向け、家に向かって走り出した。

でも、すぐにお姉さんにお礼を言っていない事を思い出し、振り返る。

お姉さんはお礼を言ってくれたけど、僕もお姉さんにお花をくれたお礼言わなくちゃ。

でも、振り返るとお姉さんはいなかった。

もしかしたら、帰っちゃったのかもしれない。空も明るくなってきたから、帰っちゃったんだ。

「　　ありがとう、お姉さん」

週末、僕はお母さんの病室に青いバラを花瓶にさして置いた。

すごく珍しいバラみたいで、お母さんは喜んでいた。

花言葉は、『奇跡』『神の祝福』だってお母さんが言った。私にぴったりとも言っていた。

僕はうれしくて、またぴょんぴょんと跳ねた。

家に帰ってから、僕はお父さんの部屋に黒赤色のバラを飾った。

父さんは花ことばを知らないみたいだったけど、色が黒百合と同じだから花ことばも一緒だと思って、『好き』って意味だと教えてから喜んでくれた。

僕の部屋には、黄色いバラと黒百合を飾った。

それから一瞬間後、お母さんは風邪が治り、退院した。

僕は嬉しくて、迎えに行きたかったんだけど、今度はお父さんが風邪をひいちゃったみたい。すごくひどい咳をしている。

お母さんの病室みたいに、赤いティッシュがゴミ箱にたくさん入っている。

今、青いバラは仏壇に飾ってある。なんでも、これのおかげで治ったからと、お母さんが飾る事にしたらしい。これでお父さんが治るかもねって。

あれからお姉さんの夢が見れないで、ちょっと寂しい。でも、きつと会える。だって、約束したから。

バラと百合は全然枯れる事もなく、一か月が経った。

もらった時の様に、キレイに咲き誇っている。

そしてある日、お父さんは起きることすらできなくなっていました。

風邪が酷いらしい。一応病院に行ったけど、まったく原因がわからないとか。入院を勧められたらしいけど、何故かお父さんは断っていた。

あと、すごいことが起きた！

なんと、宝くじが当たったのだ！ 青いバラの下に置いて置いた宝くじ。一等前後賞合わせて三億円って言ってた。どれくらいかわからないけど、お菓子がいっぱい買えるってお母さんは言ってた。

お父さんが結構前に買ったらしい。それを見つけて、お母さんが青いバラの下に置いたみたい。

本当に神様の祝福みたいね、とお母さんは言っていた。

だから青いバラさん、お願いします。早くお父さんを治してください。

それから二か月後、更にすごいことが起きた。

お父さんが死んだ。

自殺らしい。

天井から首を吊って、ぶら下がっていた。

お母さんは動揺して、何故か警察に走って行ってしまった。電話があるのに。

だから、僕はじっと見つめたんだ。

お父さんを。

そして、

笑った。

声が枯れるくらい笑った。

今まで生きて来た人生で一番笑った。笑いすぎて、お腹がいたくなってしまうた。

本当におかしかった。嬉しくてうれしくて、涙さえ出て来た。

床には、黒赤色のバラの花弁が散乱していた。

お姉さんの言った通りだった。

『風邪では無くなった』。そして、『気持も伝わった』。

ああ、何てみじめ、なんて無様。

これかなれの果て。

僕は黄色いバラを部屋に取りにゆき、死体を見せるように握った。黄色いバラは淡く光、喜んでいるようだった。

僕も嬉しかった。

そして、また笑いがこみあげてみた。

お母さんが警察を連れて帰って来て、笑っている僕を見て泣き出した。

でも、お父さんの死に狂ったわけじゃないんだよ。

これは嬉しさでの笑い。

笑ってお別れだよ。

『おようなら、お父さん』

百物語の終焉

「警察が後々調べた結果、僕の父さんは殺人を犯していたら。会社のお金を横領し、上司にバレてしまった。だから、父さんは上司を殺そうとしたんだ。一人で居る所を狙う為、電話で呼び出した。上司は逃げ、学校の前で殺されたらしい。だけど、此处で問題が起こ

った。妻と娘と八合わせてしまった。上司は一人じゃなかったんだ。ちようど妻と娘を連れて、ご飯を食べに来ていた。レストランに残し、上司はこのことやってきて、殺された。妻と娘はなかなか戻ってこない上司を心配し、探した。そこで、僕の父さんに会ってしまった。僕の父さんと上司の妻は面識があつてね、上司を探していた事を聞いた。そして、父さんに呼び出された事も知っていた。だから僕の父さんは、殺そうとした。妻は娘を逃がし、立ち向かった。そして妻は殺され、追いつかれた娘は歩道橋の上で殺された。本当にくだらない出来ごと」

少年はため息を零し、周りを見回した。

そこには、顔を青ざめさせている皆が居た。

それを無視、更に続ける。

「で、後で知つただけけど、黒赤色のバラの花言葉は、『死ぬまで恨みます』。『化けて出ます』だったんだ。つまり、父さんは殺した家族に恨まれて、呪い殺された。そして、黄色いバラの花ことばは、『笑ってわかれよう』。僕が父さんが死んだ時、本当に面白かったのは、そう言う事だったみたい」

くすくすと笑う少年は、本当に不気味だった。

皆は息を呑み、震えた声で口を開く。

「い、いやー。お前作り話の才能あるな……マジで怖かったぞ。しかも、実話って嘘ついたから特に」

「そ、そうね。すごい怖かったよ。う、うん！」

皆はうんうんと頷くが、少年は首をひねる。

「実話だけど？」

「いやいや、もうそんな設定いいから。まったく、本当に鳥肌立ったぜ。ほんと百物語って感じた」

「もう、あたしなんて途中トイレ行きたくて、我慢してたよ。誰かついてきて!」

アハハと乾いた笑いを浮かべる中、少年は『ああ』と思います。

「お金持ちになる方法。話を聞いてればわかると思うけど、青いバラが必要なんだ」

「そういえば、奇跡とか神の祝福って」

「そそ」

少年は一度部屋から出、手に花束を持って帰って来た。

そして、全員にバラを配る。

三本のバラを。

「待つて! あたし達は青いバラだけでいいわ!」

「あ、ああ。他はいらない!」

少年は首を振る。

それではダメだと。

「バラは三本必要だから。自分は黄色いバラを持ち、お母さんかお父さんに青いバラを。そして、残った方に黒赤色のバラを」

そう言って、少年は背後に飾ってある黄色いバラと、黒百合を持ち出す。

そのバラと百合は、淡く輝いていた。明らかにおかしな光。光るはずがない物が、光っている。

他の人間はビクリと震え、後ずさる。

そして、三本のバラを捨てようとするが、手が開かない。もう片方の手で抜こうとするが、抜けない。

「お、おい！ なんだよコレ！ なんで離れねーんだよ！」

「い、いや！ いやー！」

「助けてくれ！ どうやって開くんだ！」

少年はくすくすと笑っていた。

その笑い声は、空虚な部屋にこだまする。

皆は恐怖に逃げようとするが、背後のふすまは硬く、開くことはない。

「なんで出れねーんだよ！ 出せよ！ おい！」

「お願い！ 何でもするから、ここから出して！」

「『出れるわけ無いじゃないですか……うふ』」

皆の叫びに交じって、女の子の高い声が響き渡る。

小さな、十歳に届かないだろう女の子の声。

声の発信源を見ると、それは少年だった。だが、明らかにおかしい。

まるで、主音声と副音性が同時に聞こえるような、怖気が走るような声。

そして、身体を淡い光が覆っていた。小さな、少女のような形の

光。

「『ねえ、幸せになりたいでしょ？ お父さんかお母さんを殺せばいいだけ。ね？ やってみたいでしょ。お金持ちなわたし（僕）が羨ましくない？ うれやましいでしょ？』」

少女と少年の声に呼応するように、皆が持つ黄色いバラが淡く光り出す。

同時に、皆の瞳から光が消える。

まるで何かに取りりつかれたように。暗く俯く。

「……うれやましい、憎い」

「幸せ、なりたい……」

「そっか……、殺せば、アハ」

「そうだね、ああ。そう」

口々に呟く。

どちらかの親を殺せばいいと。

だが、目からはとめどなく涙が流れている。心と体が相反している。それでも、抗えない魅力が、心に渦巻く。

その大部分の感情は 嫉妬。

「『さあ、お行きなさい』」

皆はコクリと頷き、部屋から出て行ってしまふ。

そして、部屋に残ったのは少年と 赤いドレスを来た女性。

「またあなたは……お父さんだけじゃ満足できなかったの？」

呆れたように、ドレスの女性は呟く。少年がお姉さんと言っていた女性が。

「『出来るわけないわ！ 幸せな人間が憎い！ なんだだって殺したい！ アハハ、皆みんな、わたし（僕）と同じにしてあげるから』」
「ふふ、でもいつか。わたしは君と約束しちゃったもん。永遠に君と一緒に居るってことで、黒百合渡しちゃったし」

女性の発言に、黄色いバラは力を失ったように光を失い、頬を掻く少年だけが残った。

黒百合が、黒く光を放っている。

「まったく、お姉さん。黒百合の花言葉が『好き』と『呪い』だって言うの遅いよ」

「んふ、だって、わたしを貰ってくれてるって言ったでしょ？ ずっと一緒に居る（呪う）って」

少年は大きく歎息し、黄色いバラと黒百合を花瓶に戻す。

「黄色いバラだって……確かに『笑って別れましょう』って花言葉もあるけど……」

「『嫉妬』って意味もあるわね。だから、彼女は嫉妬している。家族円満な子を。幸せを崩されたからね」

「しかも『あなたには誠意がありません』なんて意味もあるなんて知らなかったよ。おかげで、よく身体取られちゃってるし」

少年はジトつとした視線を女性に向けるが、女性はくすくすと笑っているだけだった。悪びれもしていない。

「あら？ でも、わたしと入れるんだからいいんじゃない？ わたしは嬉しいけど？」

少年は目を瞑り、くすりと一つ笑った。
そして、女性の手を取る。

「ああ、後悔はしてないよ。僕が愛してるのは『死神』だもの」

少年は手を引き、女性の唇に、自分の唇を重ねる。

それは甘く、冷たい感触だった。

酷く甘美。同時に、酷く空虚。

「僕は君のお婿さんだから」「私は君のお嫁さんだから」

声を合わせ、二人は笑い合う。

どこまでも明るく笑う。

少年は憫笑する。

死神は嘲笑する。

嫉妬する心を嘲り笑う。

三色のバラ・c a i m様（後書き）

小学校のころ何かの夢を見て寝ぼけたことがあった。

歩道を歩き、道路を渡り、何故か学校へ行かなければならない気がした。

学校に着きボーっとしているとたまたまいた女の人に声をかけられて目を覚ます。

そしてその人に礼を言って走って帰宅。

昔あったことですが、寝ぼけた原因の夢が思い出せません。

というわけで夢の内容と寝ぼけているときの思考をでっち上げて欲しいです。

覚えているのは“学校へ行かなければならない”という謎の意味だけです。

小説のURLは無し、名前はc a i mでお願いします。

追憶の日記帳・りお@Rio様（前書き）

本当にこれは投下しようか迷いました。

送ってもらった思い出がすごすぎて、自分で書いてる話が全然納得出来ないんです。

頭で描いてる事が全て伝わればどれほどいいか。

足りない設定と言うか、設定を自分で考えてしまっていていいのかわからないか？ 侮辱になってしまわないか？ 思い出を酷くしてはしまわないか？ キャラ設定がわからないから自分で考えちゃったし……。

しかも、だんだんと感情移入し、泣きながら書いてました。

文章にないたわけではなくて、りおさんの気持ちや夏さんの気持ちになって泣けてきました。実話だと思つたと泣けてきちゃいます。

それを、こんな駄作にしてしまつてすみません。

テンポ的には、最初らへんはほんわか日常から入る……みたいな。

一言言わせてください。

原案は実話です。

最後に物語の中の理緒（本人）さんからのありがたいお言葉があります。

文字数が足りなくて、少しあとがきに入ってしまったのはすみません。

本当に色々ごめんなさい。

ついでに残り0通。

打ち切りになっちゃおう。・・・

追憶の日記帳・りお@Rio様

四月頭・屋上

場所は某私立高校の屋上。

そこに、三年生に進級したばかりの、三人の少女の姿があった。時間が十二時を少し過ぎたあたりなので、昼食時だろう。実際お弁当を持っていることから、昼食だと言っているような物である。

三人はベンチに座り、傍目からは仲良く、実際も仲良くご飯を食べていた。

まだ肌寒い四月初頭、屋上に人が居るはずもなく、三人だけ。

「夏は相変わらずちっちゃいな。お弁当もちっちゃいし身長もちっちゃいし胸は　ごめん……」

そんな声を発したのは、三人のうちの一番身長が大きい少女
安藤優。^{あんどうゆう}

大きいと言っても、165程度だろう。

少し茶色がかった肩まである髪が、風を浴びてなびいている。可愛いと言っより、カッコイイ。

優はけらけらと笑い、明らかにからかいの色が入った言葉をぶつける。

「ちっちゃいちっちゃい言うなー！ お弁当と身長は許すけど、最後の謝罪がおかしいでしょ！？ なんだかすごい可哀そうな目で見られてるし！ って、理緒までそんな蔑む視線！？」

一番身長がちっちゃい少女

如月夏きんづきのなつ

明らかに他の二人より小さく、身長も150ないだろう。もちろんこれには理由があり、夏は身体が弱いのだ。必然的に身体が小さくなってしまおう。と言うか、小食なのが一番の理由だ。

さらさらとした、腰まである長い黒髪を持つ少女。完全にキレイとかカッコいいと言う言葉は似合わず、可愛らしいが合つだろう。高校生以上に見られない事がコンプレックスらしい。場合によっては小学生に間違えられる。

何故身体が弱いのに屋上か それは教室でのうるささやほこりつぽさより、少し肌寒くても屋上がいいと言う結果である。

それにしても 酷くからかいがいがいな少女だった。実際、二人の少女にいつもからかわれている。

「ん？ いいじゃない別に。ぺったん以下でもいいと思うわ。需要もある……なんてことは皆無で幼稚園みただけど、別にいいと思うわ。うん、いいわ。だって、私に関係ないし？」

「わかってるけどそんなストレートにビシッ、バシッって感じで直球発言する人初めてだよッ！ もっとオブラートに包んでよ！ す、すこし大きくなったよね！ とか」

「大きくなったわね。そのヘアピン」

「確かに昨日より大きいけど……うくー！」

夏が暴れている眼前で、無表情にお弁当をパクついている、暴れる原因を作った少女 橘理緒たちばなりお

毒舌つぽいが、別に普段から毒舌なわけではなく、夏をからかう

と面白いからからかっているだけだ。背中まである黒髪を耳に掻きあげながら、嘲笑うかのような嘲笑を浮かべている。

こんなでも、三人は三年間同じクラス　そして、非常に仲が良かった。

理緒はふと夏を一瞥し、くすりと笑う。

「そんなふてくされて牛乳飲んでも意味ないわよ？」

「誰のせいで怒ってるのよ！　絶対大きくなって見返してやる！」
「え？」

理緒は啞然とした表情を浮かべ、演技っぽく箸を落とした。
もちろん、場所は計算して膝の上に。

「もしかして牛乳で成長するって迷信を信じ、て……。イヤだわ、そんな人種が未だに居るなんて……。そもそも、日本人はラクターゼを持っていないから、乳糖を分解出来ないのよ？　逆にお腹下して体調悪くなるだけよ」

「辛辣すぎる！　泣くよ、泣きますよ、泣きますからね！」

「おお、夏が泣くのか。そういえば、夏が鳴くって風流な気がしない？」

「優の発言の意図がわからない！」

結局夏が泣く事はなく、うなだれるだけだった。

いつも通りのやり取り。

なんだかんだで、三人は仲が良く、楽しそうだった。

仲が良いからこそ、こつやってバカを言い合えるとも言える。

「そついえば、今日進路希望調査の提出あったわよね？　二人はどこにしたの？」

「はい！ はいっ！」

「じゃ、優」

「必死に手上げてても無意味！ 何て理不尽！ 世界は理不尽である！ わたしは世界の一部だ！ 故に皆がわたしには理不尽なのである！」

「ソクラテスに謝りなさい」

夏はその理不尽さを三段論法にして説明したが、未熟すぎて理緒にバツサリ切られてしまった。有名な三段論法の例であるソクラテスに謝れと。

「んー、あたしは今の学力で行けるとこでいいってことで、青山学院」

「へー、なかなかの所ね」

「将来はサラリーマンでいいし？」

「ねえ、突っ込み待ち？ 突っ込み待ちなの！？ 青山でそこそこって言ってるそのビックガールに突っ込みすればいいの！？」

夏が興奮しているが、いつものことなので、二人はさらりと無視を決め込んだ。

「じゃあ、次は」

「はい！ はい！」

「私も今のままってことで、早稲田辺りにしようかなって」

「ねえ！ 無視して更に突っ込み待ち！？ わたしはどうすればいいの！」

「どうしたのよ夏？ もう五月病にかかっちゃったの？」

「五月病にどんな意味を期待してるの！？ 五月蠅い（うるさい）とかの意味ないからね！」

「まるで夜耳元でする羽虫

蠅ハエのようにうるさいわね」

「蚊じゃなくて蠅!? 部屋が不潔過ぎる!」

「コックローチもいるわ」

「ゴキブリまで!?!」

本当に仲がいいが、もし此処に夏が居なかったらと思うと、怖い程である。

一体誰が突っ込みをすればいいのか、と言う意味で。

「次は—」

「はい! はいは—い! え—つと—」

「そろそろお昼も終わりね」

「まだ半分以上残ってるから! どれだけわたしは蛇蝎だかつされてるの!?! こんな厭世えんせい死ね!」

夏が泣きだしたところで、理緒と優は少したじろぎ、視線を交差させる。

からかうのはいいが、泣かせるのは嫌だ。泣くと言うことは、本気で嫌がつているのだろう。

「夏は何て書いたのか?」

「えつとね! えつとね! 防衛医科大学!」

二人は気を使って夏に振ったのだが、今度はどうやって突っ込みばいいか悩み始めた。

「ごめん……夏。私にはそれに突っ込む実力が無いわ」

「突っ込むとこないでしょ!?!」

二人は本当に申し訳なさそうに俯いたが、夏は痛憤してギヤギヤ—騒ぎ出した。

「何で最後に言ったところが希望になってるの!? と言うかロマンシングサガ2なの!? そこに就職するって考える理緒がすごい! そうじゃなくて、お医者さんですから!」

「ま、冗談は置いておいて、何で防衛医科大学? あそこって東大より倍率高いわよ? 百倍普通に超えちゃってるし」

「ふふ、なんと、あそこは入学金と学費免除なんです!」

夏は胸を張って、自分の知識をひけらかしていた。

胸以外にも足りない所がたくさんあるので、理緒も口を開く。

「ついでに特別公務員だから月11万が手当としてももらえるわね。ついでに完全寮制」

「え?」

夏は知らなかったのか、困惑した様子で理緒を見つめる。
そして今度は優から声が。

「後、卒業後は強制的に専門研修医で束縛されるな、九年間」

「え? え?」

「更に研修医を途中でやめたら、卒業までにかかった経費五千万を払わなくてはいけない。公務員だから医者としての給料も安いって」
「病院内にいるってことにして外注で稼いでる人多々。バレたらやめさせられるが。最近は直接連絡出来るようにしたから、外注行けないって嘆いてるな」

「え? なんで、何で知ってるの? ハッ、まさか二人とも!」

「別に将来はサラリーマンでいいけど」

「同じく」

「言いたい事先取りした上に否定もされた!」

本当にからかいやすい少女で、理緒と優はぶんぶん怒っている夏

を見てニヤニヤとしていた。

ちなみに、これは実話で、外注の方が給料は相当高い。開業医などと比べると、防衛医科大学勤務は二分の一程度。ただ、公務員だから安定してはいるが。

「というか、今は基本情報ね。後、夏。あんたいま成績どれくらいよ?」

「防大は国立で他の場所みたいに金持ちしか入れないとかはないから、医者を目指すなら一番人気だな。相当頭がよくないとダメだよ」

「う、うくうー! 下から六番! 下から数えたら一ケタなんだから!」

「残念、私は上から数えても夏を超えて二位」

「あたしは五位だったな」

「なんでそんな二人がサラリーマンでわたしが医者さんに!」
『知らん』

更にバツサリと切られ、夏はうーうー言って涙ぐんでいた。
そんな夏を見つめ、かわいいなあとか二人は思っていた。

「で、入りたい理由は?」

「……んふ?」

「ああ、つまりお金持ちになってお菓子いっぱい食べたいのね」

理緒の推測に、夏は冷や汗をダラダラと流していた。

別にそれが理由の全てでもなかったが、理由の一つではあったのだ。

「ついでに、身体の仕組みを知っても、身長とか胸は大きく出来ない」

優の推測に、既に玉の汗が額から零れ落ちていた。それを見た二人は、ハア……と、長歎息を吐きだした。

「ま、もし本当に入れたら、何でも好きな物おごって上げるわ」

「あたしは言う事何でも聞こう」

「言ったね！ 絶対だからね！ 絶対ビデオカメラ買ってもらって言う事聞かせるから！」

一転して夏は元気になり、キャツキヤと未来予想図を浮かべていた。

「と言うか、何故ビデオカメラ？」

「ひ・み・つ、キャツ　って、イタイイタイ！ なったらおひへるから！ 頬引つはらないれ！」

頬を引っ張っていた理緒だが、急に立ち上がる。

それを見た夏は、キョトンと首を傾げた。一体どうしたのだと。だが、手元を見ればおのずとわかる。

既に二人は弁当箱をしまっていた。

更に夏の手元には、半分以上残っている弁当箱が。

「後一分でチャイム鳴るわ」

「え？ ま、待って！　せめてわたしが食べるまで」

「さーて、行くわよ優」

「待って、待ってよー！　全然食べてないんだから！　お腹すいて授業中にお菓子食べたならまた怒られちゃう！　って、何で無視して言っちゃうの！　わかったからー！」

夏は急いで弁当箱をしまい、二人に向かって走り出す。

そんな夏の頭に、二人は手を乗せ「えらいえらいちゃんとしませ
たねー」とからかっている。

もちろんそれに反発し、夏は頬を膨らませて怒っていた。

そんな、何気ない高校生活。

だが、誰よりも充実していた。人が聞いたら普通だと言っかもし
れないが、三人にとって、それはかけがえのない物だった。

「もうっ！ 帰ったら理緒と優に虐められたって日記に書こうっ」と

！ 一日も虐められてない日はないけど！」

「なにその虐められ日記？」

「愚行とか言わないで！」

電車内

その日、いつも通り理緒は電車に乗っていた。

別に痴漢されるとか思っているわけじゃないけど、女性車両。

ホームの一番端に階段があるので、必然的に女性車両が近いのだ。

それに、空いているから楽ではある。

この化粧とか香水臭ささえなければなあ、と常日頃から思っていたが。

そして、電車に乗った所で、丁度夏を見つけた。

いつもは夏の方が早く学校についているのだけど、今日は珍しく一緒。

脅かそうかな、と思って背後から近づくが……夏は勉強をしていた。

単語帳を持ち、必死にぶつぶつと呟いている。傍目から見ると少し怪しい。

理緒は、お父さんが十八禁的な雑誌を見てぶつぶつ言ってる姿に似てるな、と思いだしたりする。

なんとなく邪魔しちやまずいと思い、その場は声を掛けなかった。どうせ降りる時は一緒だし、その時話しかければいいと。

それと、『本当に勉強してるんだ』と、少し見直した。夢はお医者さんだって言ってたし、と。

放課後

進路希望調査を出してから一週間後、三人とも途中まで返る方向が同じなので、理緒と優は夏を誘うが。

「あ、ごめんね。ちょっと分からない所があつて、今から先生に訊きに行こうかなつて。だから先に帰つてていいよ」

「え？ 放課後になんて訊きに行つて、危機にあつたらどうするのよ」

「無理やり!? 女の先生ですから!」

二人は少し考え、ポンと手を叩く。

「だったら、私達が教えればいいのよ。どうせ帰つても暇だし」

「あたしもいいけど?」

「いいの!? 優しいなんてすごく珍しい! いつもは言語を絶する程嵩にかかつてるのに!」

「ねえ、私が高慢ちきだつて言いたいの? ねえ?」

「イダイイダイ! 嘘です! 目もあやなほど美人な素敵なお姉さんです! わたしのほうが産まれ早いけど!」

頬をぐにぐにと引つ張られ、夏は速攻降参した。

やはり理緒は高慢ちきだったな、と思量しながら。

「で、何がわからないの?」

「えっと、これ何ですが……」

そう言つて夏が指さしていた場所は、

ドイツ語。

選択授業の教科である。やはり医者を目指すだけあつて、ドイツ語なのか……と二人は思った。

最先端医療はドイツだから、ドイツ語が読めないと何もできない。

「あー、でも二人はフランス語選択ですし」

「Ellis baute neulich ein Haus .」

Aber brach ich heute zusammen.
Nachdem das ganze Haus des Str
ohs zerbrechlich ist. Ich beabs
ichtigen, es dieses Mal mit Ton
zu machen.»
「え？」

夏はポカンと口を大きく開け、固まってしまった。
何故？ と言う色の表情を浮かべて。

「何で理緒がわかるの!？」
「当然よ。と言うか、基本よねコレ？ それより、この例文頭がおかしいわ。エリスは先日家を新築しました。しかし、今日倒壊しました。やはり藁の家は脆いですね。今度は粘土で作ろうと思った。ってどんな例文よ!？ むしろエリスの頭が脆すぎるわ。エリスを作りなおした方が早いわ!」
「いーえ! エリスだって頑張って生きてるんです! きつとお金が無かったから藁で……ぐすつ、可哀そうなエリス。健気」

夏がすすり泣き始めたが、理緒と優は冷めた視線を向けていた。
何故なら

「次の例文読みなさい。粘土が無かったので、仕方なく豪邸を買いました。値段は安くて、五百万ユーロでした。お父さんにいたら買ってくれたけど、もっといい家が良かったです。って、五百万ユーロって約五億五千万円よ! どんだけ金持ちよ! しかも、不満ありそうだし! エリス死ねばいいわ!」
「き、きつとお父さんは借金で……ああ、次の文で資産家とか言ってる。エリス、もうフォロイ出来ないよ。何でそんな人間なの」
「むしろどこからこんな文見つけて来たか不明!」

「えーっと、園児でもわかるドイツ語教本」

「絶対ドイツの園児よそれ！ 日本人の園児には無理！ いくら夏が園児並みに小さくて頭も園児以下だとしても」

「酷過ぎる！ さすがに園児はないですから！ 身長だっていつか百八十超えますし（予定）！ 頭だってマリリンのIQ230超えます（予定）から！」

「ああ、ごめんなさい。さすがに失礼だったわ」

「当然です！」

夏は久々に理緒に勝ったと、したり顔をし、ない胸を張った。

その顔は自信に満ち、意を強くしている。

「園児未満だったわ。園児の問題解けなかったわけだし当然ね。こんな簡単な推理が出来ないなんて、私もボケたかしら」

「そんな納得しないでよ！？ わたしを陥れる為なら自分まで卑下していいの！？」

「当然じゃない。自分を自慢するなんてバカよ。交渉では相手の意見に賛同しながらも反対を強くして、最終的に叩き潰すのよ！ 計算が大事ね」

「此処で言うことじゃ絶対ない！ どちら辺が賛同してるのかもわからない！」

「推理つて所よ。水理学で水の流れを計算するの。水のような頭を持つ夏の思考の流れをを計算し、導き出したわ」

「全然賛同関係無くなってる！ 漢字もいつの間にか関わってるし！ 水の様になって、水のように軽いつてこと！？ 自分は重油の様に重いつて言うんですか！」

「私は水銀よ」

「まさかの一番重い液体が来た！ どれだけ自信家なんですか！」

夏ははあはあと息を荒くしているが、理緒は涼しい顔だ。

ついでに、優はお腹が空いたのか、お昼ごはんに食べていなかったドーナッツを食べている。

「実は嘘よ。私は中性子星よ」

「1cm3で10億トンの液体最高の重さまで!? 自信家すぎてむしろ尊敬する!」

むしろ、それを知っている夏は天才なのかもしれない。

そんな事を知っている女子高生など、学校に一人いればいい方だろう。此処に二人いるのだが、それもそれで異常だが。

確実にドイツ語を知っている女子高生よりはレアだ。

「いいからやりなさい。わからないところが在ったら教えてあげるわ。ちなみに質問した時の声0.01デジベルにつき、髪の毛の本数から五十パーセント貰うわ」

「一言で全部取られる! と言うか騒音って言いたいんですか!? 一万年後に払うので此処教えてください!」

もう夏は吹っ切れ、素直に理緒に質問することにした。

それから暫く二人で勉強を続けた。

その間、優は眠かったのか寝てしまっていた。

結局勉強会が終わったのは、学校が閉まる直前だった。

散々からかったが、実は理緒は、夏の頑張りを見ていたので教えてあげたかったのだ。

授業中も見れていたが、必死に書きとりをしていた。教師の無駄な話の最中は別の勉強すらしていた。

友人が頑張っているなら、応援したいと思ったのだ。もし本当に医者になれたら、祝福してあげようと。

「そういえば、何で教えてくれたの？」

「夏が訊きに行こうとした先生がレスだからよ。行ってたら本当に危機だったわ」

「どんな作り話！」

「……」

「作り話だよね！？ 作り話って言ってよ！ もう普通の教師として見れない！ あの優しさはそう言うことだったの！？」

夏が理緒の隣でぐわんぐわんと頭を振りまわしているが、それを見た理緒はほくそ笑んでいたとか何とか。

すぐに夏は頭を振り回すのをやめ、二人を見上げた。身長が小さく、必然的に見え上げる形になってしまったのだ。

「あ、二人とも一緒に防衛医科大学受けませんか？」

「駄目よ。夏だけ落ちちゃう」

「落ちても次の年行くからいいんだもん！」

ある日。

夏休み直前、休日だったが、三人は理緒の家に集まっていた。ちよつとした閑話休題のようなパーティーだ。

「おめでとう、夏」

「よかったなー、夏」

「ありがとう！ これも二人のおかげだよ！」

夏はにこにここと笑顔を浮かべ、オレンジジュースを飲んでいた。夏季休暇前のテストで、なんと夏は十位以内に入ってしまった。さすがのこれには理緒と優も驚き、おめでとうパーティーを開く事になったのだ。

「八位なんて人生ではじめてだよ！ この調子なら理緒と優を抜くのも時間の問題だね！」

「そうね。ちなみに私は一位だったわ」

「あたしは二位」

「何で上がってるの！？ ずっとわたしに教えてたのに！ てかほぼ二人とも満点とか理不尽に死ぬ！」

二人がカバンから取り出したテスト結果を見つめ、夏は咽び泣いた。

「確かに教えてたけど、教えるのは教わるより勉強になるのよ？ 復習にもなるし」

「ああ、復讐にもなるしな」

「優は誰に復讐するつもりなの！？」

「牛乳を無理やり飲ませた夏にだ。そのせいで胸のサイズが上がったぞ。Eにな」

「ラクターゼ持ちの日本人が憎い！ そして一向に成長しないわたしの胸は成長さばりすぎ！ 豊胸マツサージも意味ない！」

そんな怒り心頭な夏の様子に、理緒と優は首をひねる。

その視線は夏の胸。

「豊胸マッサージって、マッサージする為に掴めないじゃない。どうやってするのよ？」

「腕立て伏せじゃないか？」

「胸筋つけるってことですか！？ もうそれは胸でもなんでもないですか！ 完全に筋トレ！ 牛乳よりプロテインで胸を大きくしようとする女の子なんて嫌過ぎる！」

確かにと、理緒と優はうんうん頷く。

むしろ硬すぎてすごく嫌だな、と。

「身長も頭一個違うなんて こほっこほっ、酷いよ」

「ん？ 風邪引いたの？」

「最近ちよつと風邪っぽいですね。でも、今までよりずっと楽なんです、そこまでじゃないかも」

夏は身体が弱い。

だから風邪をひく事には慣れているのだ。どれくらいでヤバイかわかる。

熱もないので、ただ喉を痛めた程度だろう。

「夜遅くまで勉強してたから、咽痛めちゃって」

「病院は？」

「まだ大丈夫ですよ。それに、ちゃんと薬は飲んでるから、この程度ならすぐ治るよ」

「そうやって油断していると、育つものも育たないわよ？」

「待って！ どこ見て言ってるの！ と言うか全然風邪関係ないよねソレ！？」

「でも、実際夏の身長が伸びたりしたら嫌よ。なんだか夏が夏じゃ

ないみたい。かわいい夏がいいわ」

「そ、そうですか？」

理緒の言葉に照れ、夏は両手を膝の上にちよこんと乗せた。
恥ずかしいようだが、嬉しそうだ。

「うん。大きくなったらからかえないわ。そんな夏は夏じゃなくてナスで十分よ」

「ナスも十分悪口に聞こえるよ！？ 太ってて起伏がないって言われてるみたい」

「え？ 言ってるんだけど？ 身長は伸びるけど胸は大きくなるって言ってるじゃないし」

「成長しても胸だけは大きくならないで、しかもお腹が大きくなるとか発狂する！」

「大丈夫よ。夏のお母さんは美人でキレイでしょ？ きっと似るわ」

「そ、そう？」

「お母さんもちっちゃくて胸ないけどね」

「親子そろって貶された！」

そんなふざけたやり取りをしていると、隣で優が欠伸をしていた。本当に眠そうだ。きっと、優はよく寝るから育っているのだろう。

「そろそろ寝ましようか？ どうせ泊まって行くわけだし」

「わたしもちよっと眠い、じほっ」

夏が咳をしながら目をこする。

そんな夏を、理緒はじっと見つめていた。

「じゃ、布団しくわ。夏はベッドで寝なさい」

「え？ でも、悪いよ」

「言いなおすわ。テーブル片付けるのにちっちゃくて邪魔だから、ベッドの上から動かないで」

「そんな理由だと思つてたよちくしょー！」

「あ、小梅太夫の物真似？ 似てるわ。肌も白いし」

「あんなに肌白くない！ そもそも物真似じゃないから！ もういい、寝る！」

そんな事を言い、夏はベッドに飛び込んだ。

ついでに、優ももそもそと夏の隣に潜り込んで寝てしまった。

それからゆつくりとお菓子のゴミやテーブルを片付け、理緒は布団を敷いた。既に二人は夢の中にいるようで、ノンレム睡眠特有の呼吸を繰り返している。

更に理緒は一階から毛布を持ってきて、タオルケットだけだった夏と優の上に掛ける。

夏（季節）にこれはかなり熱いだろう。

「えーつと……空気清浄機と、加湿機でいいかしら」

起きているのが一人の空虚な部屋で、理緒は呟いた。

それから理緒は、優しげな表情で夏を見つめる。

熱いのか、夏はすぐに布団をはいでしまう。そのたびに掛け直し、それを朝まで繰り返した。

そんなわけで、朝になって二人が起きると、理緒は勉強をしていた。

「何で勉強してるの！ わたしもしたかった！」

「私も起きたばかりよ。今日は三人で勉強しましょうか？」

「する！」

理緒は相変わらずの優しげな笑みで、嘘をついた。目の下の隈は化粧で誤魔化し、起きたばかりだと。

よく見れば、理緒の布団には寝た形跡がない。

夏はそれに気付かなかった。

優はそれに気付いたようだが、理緒が唇に人差し指を当て、シーと黙っているように言った。

身体がつかいだろうに、夏は頑張っているのだ。だったら、これぐらいなんてことはない。

「ねえねえ、やっぱり一緒に防衛医科大学に」

「サラリーマンでいいわよ。面倒くさい」「ぶーぶー」

三人はいつも通り、学校の屋上に居た。

七月後半なので寒くはなく、生温かい風が三人を撫でる。

終業式が終わり、本当は午前中だけだったのだが、三人は此処が好きで、いつものように訪れていた。

今現在、夏がニヤニヤとした笑みを浮かべて二人を見ていた。

そんな夏を見据える理緒と優は、早くしろとばかりな視線だ。

「ふっふっふー、ちゃんと成績みてないよね？ いつせいのせつ、

だからね？ フライイングなくちゃんと」

「これでいい？」

「ダメー！ 見てないから！ わたしは見てない！ ダメ！ いつせいの、せつだって！」

夏のセリフを遮り、理緒が一枚の半折にされた紙を前に出した。

夏はそれを見ぬように、目を塞いで、あーあー言っている。

仕方なく理緒は紙を手元に寄せた。

その紙は通知表。

夏が全員で比べようと言い、わざわざ見るなど念を押ししたのだ。現在の夏の顔を見る限り、相当自信があるのだろう。

「では、このコインが落ちたら前に出すね」

『…………』

はつきり言って二人はそこまでする意味がわからなかった。

いいから早く見せろ、と。

そして、夏は五百円玉を上空に投げた。

それは推進力を持ち、上昇する。そして地球の重力に引かれ、落

下を開始した。

そこで理緒が動いた　　夏の前の通知表をさっと奪い取る。
その次に優が動いた　　五百円玉をキャッチし、財布に入れる。
茫然としている夏は　　口をポカンと開けていた。

「つてー！　なんで通知表奪って五百円取るの！？　返して！　通知表も五百円も返してー！」

夏がぎゃーぎゃー言ってる中、二人は夏の通知表を見ていた。
そして、感嘆したような色を浮かべる。

「すごいわね。五段階中四ばっかり。五も一個あるし……保健が」
「隠れエロだ。エロがいる。そんなちっちゃい身体で一体何を考え
ているんだ」
「わたしだっけ見てなかったのに！　嬉しいけど最後に変なオチが
ついてる！？」

夏は成績までネタで決まっているようだった。
理緒は感心し、内心嬉しかった。教えたかいたがあったと。それに、
夏の頑張りが反映されてよかったと。
だが、ある事に気がついた。

「去年の成績やばいわね。なにこれ？　二ばかり」
「多分それは一だったんだが補修で二になったんじゃないか？」
「ああ……」

二人は夏の頭に手を置き、優しく見守った。

「何その可哀そうな視線！？　俯瞰で見ないでよ！」

実際は手を起きやすい位置に頭があつたので、置いてみただけである。

夏はそれを生温かい視線と勘違いしたようだ。

「二人の見せてよ！ わたしのだけ見られるなんて不公平！」

そうやって夏は、理緒の通知表を奪い取って閲覧する。

そして、固まった。

まるでオブジェクトの様に固まり、その姿を二人は概観するよう見つめる。

「何これ？ もしかして理緒だけ十段階評価？ つまり二か三つてこと」

「現実逃避はやめなさい。見苦しいわよ最強天然バカ」

理緒はスッと夏の手から通知表を抜き取り、視線を落とす。

そこには、5以外の数字が載っていない。

だが、理緒は無表情のままだった。

毎回同じなのだから、これほどおもしろみもない通知表はないだろう。

「その全然嬉しくなさそうな顔がズルい！ こんどは優のも！」

全員で優のを見てみるが、ほぼ5だけで、保健だけが4。

「あら、夏と逆ね。他は5だし。これで夏が隠れエロだって証明されたわ」

「どこがっ！？ この成績の何処にそんな要素があつたの！ 逆！！
わたしがエロって展開がわからない！」

夏は頭を抱え込んでしまったが、二人は被りを振っていた。さも呆れた、と言わんばかりに。

そんな事もわからないのか？ と目が言っている。

「考えてみなさい。優はある授業内容の時寝てたのよ」

「え？」

夏が優に視線を向けると、優は苦笑いを浮かべていた。

「性教育のビデオのところね。つまらなかったし。ちなみにその時間、私は周囲を観察していたわ。すると　なんとということでしょう。まるで目をビデオカメラのようにし、1フレームも見逃さない気分になっています。全てを脳内に記憶し、いつでも取り出せるような匠のころづかいが現れていますね。って感じの夏が居た」

「劇的ビフォーアフター！？　サゼエさんの声にしか聞こえない！」

「中身は同じ加藤みどりよ。ちなみに、夏の声優は久本雅美」

「それだけは違う！　せめて津田雅美にして！」

「彼女彼女の事情は古いな。実際問題小学生みたいな声だ」

「うくう……」

夏は反論しなかったが、反論出来なかった。確かにそう言われた事もあり、自身もそう思っていたりした。

「結局何故かわたしがバカにさ　こほっ、けほっ……」

「なかなか治らないわね」

「うーん。でも、病院に行っても普通の風邪だって。ただ身体が弱いから、長引いちやうだけだって言ってた」

夏は咳をする時は少し苦しそうだったが、笑顔でそう言い切った。

理緒は自分が着ていたホワイトカーディガンを夏にかける。

「……暑いよ」

「安心して。見てるこっちも暑苦しいから。まるで稽古が終わった後のお相撲さんが、エレベーターにいつぱい入って来た時のような暑苦しさよ」

「そこまでの暑苦しさ!？」

「それに、夏は他の人より一枚着ている物が少ないんだから寒いでしょう?」

「何で?」

夏はキョトンと可愛らしく小首をかしげたが、

「ブラがいらないわ」

「そんなことだろうと思ったよっ! 付けてるから! 一応つけてるからね!」

「一応……ね」

「お母さんにも要らないって言われたけど……一応」

自身の発言で夏はうなだれた。

少なからず自分でもいらなれないと思っっているようだ。

「とりあえず帰りましょうか? これ以上おそくなると寒くなるわ」

「ん、せっかくだし何か食べて帰るか?」

「パフェ! パフェが食べたい!」

「仕方ないわね『菊や』に行く? あそこちょうどアイスクリームラーメンあるし」

「何でそんなに捻くれてるの!? しかも足立区まで行かないといけない!」

「嘘よ。ファミレスでいいわ」

夏はパアッと顔を輝かせ、勢いよく立ち上がった。地に足が立っていないような足取りだ。パフェでそこまで喜ぶなぞ、完璧に小学生にしか見えない。

結局、帰る途中にあるファミレスで食べることにした。

夏の成績が上がったお祝いと言う事で、理緒と優はパフェをおこつて上げた。それだけで夏は幸せそうにしていた。

「あ、それで進路なんです、二人も防衛大に」

「行かないわね」

「ですよー……」

最近では毎日夏が二人を防衛大に誘う事が日課になって来ている。

夏休み中

理緒は最初の1週間で宿題を全て終わらせ、暇を持て余していた。高校生にもなって生活日記があることにゲンナリしたが、夏休み初日で適当にでっちあげて終わらせてしまった。

夏、優と遊ぼうかなと思いメールをするが、優は母方の実家に帰

省しているらしい。

そして夏は

『From 如月夏 Subject Re:ごめんなさい。

なんだか少し風邪っぽくて、家から出れない状態です。

治ったら遊びに行くので、ちょっと待ってね。

あ、後勉強はちゃんとしてます。

それはそうと、理緒も一緒に防衛大に

』

何故かメールでは敬語な事に、理緒はくすりと笑みを浮かべる。

だが、結局暇な事には変わりはなく、ベットに寝転んで足をパタパタとしていた。

さすがに実家に帰省している優にメールをちよくちよく送るのも悪いし、夏になんて送ったら無理して返してきそうだから送れない。きつと寝ないで返すだろう。

ただでさえ機械音痴でメール打つのが遅いの。

暇すぎて、仕方なく理緒は漫画をよんだり、昔の写メを見たりして時間をつぶす事にした。

「にしても……夏はどれだけ一緒に大学行きたいのよ」

そんなため息交じりの声が零れ落ちた。

夏休み中、夏とは全く遊べなかった。

何回か理緒と優でお見舞いに家まで行ったけど、風邪が酷いようだ。それでも、高熱とか咳が酷いわけではなくて、平熱より少し熱がずっと続いてる感じ。

普通なら休まないと思うが、夏は身体が弱いので、念の為らしい。家に行くと、夏は嬉しそうに笑っていた。

ベットから起きあがろうとする夏を理緒が押しとどめ、色々な話を聞かせていた。

あんまり他の友達と遊んだとか言うのもなんだかなと思い、見た映画や面白かった事などを話す。

そして、1時間程でいつも帰る。

あまり長くいると、夏は無理をしてしまうと思ったからだ。

学校が始まったが、夏は学校に来ていなかった。

話を聞くと、咳が酷くなってきたから病院に入院したらしい。

一応の入院の為、個室ではない。ただの風邪だから大丈夫とか。学校が始まってから、理緒と優の日課は帰りに夏の病院に通う事となった。

お菓子を持って行ったり、プリントなどを持ってゆく。

今日も二人は夏の元に来ていた。

スライド式の扉を開け、夏が寝ているベットに向かう。

夏のベットの周りには、おびただしい数の千羽鶴がかかっている。これは、毎日理緒と優が話をしながら折りためているものだ。数はどんどん増し、仕切りであるカーテンからはみ出してしまうている。

二人とも今では一羽を三十秒で折れるほど上達してしまった。

「あ、来てくれてありがとー、ごほっ　えへへ」
「だから起きなくていいって言ってるでしょ？　それに、また勉強してたの？」

夏は起き上がりながら、顔を綻ばさせている。

少し痩せてしまっているが、元気そうではある。もともと、咳が酷いのは変わらない。

「ただの風邪なのに大げさだよ。勉強はね、お医者さんになりたいから。今年は無理でも、来年こそはって、ね」

「全く、そんなにお金欲しいの？」

「あはは、まあ……ね」

夏はなんとなく歯切れが悪く、誤魔化す様な笑みを浮かべていた。きっと、本当はお金が欲しいわけではないのだろう。理緒と優にはわからない理由がある。

「じゃ、今日の折り紙当番は優ね。私は勉強教えるから」

「よろしくおねがいします、先生」

「うん。崇めるように」

「崇めてるよ？」

「わたしも夏を崇め奉ってるわ」

「既に死霊の域！？　げほっ」

「ああ、興奮しちゃダメよ？　咳出ちゃうから」

「誰のせい！？　後一言言わせてもらおうと、この部屋怖すぎるー！」

そんな夏の直言に、理緒は周りを見回す。そして、視線を理緒に戻した。

「もしかして、周りの人が夏にちよつかいを？ 殺してくるわ」

「ちあう！ 理緒が持ってきてくれる物が怖いのに！ 何で片目だけ眼球がない招き猫があるの！？」

「願いが叶ったら この場合夏の風邪が治ったら書くのよ」

「ダルマ！？ 招き猫でそれは本当に怖いから！ 夜とか怖すぎる！ それに毎日一個持ってくるから二十匹くらいいるし！」

「愛よ」

「愛が怖いッ！」

「ついでに今日も持ってきたわ」

「デカツ！？ なんで大きさがペットボトル大くらいあるの！」

「愛よ」

「愛が大きいッ！」

そんなくだらないやり取りをしていると、夏の布団の上には鶴が着々と溜まってゆく。毎日埋もれる程作るのだ。

もう邪魔だしいらないだろうと思うのだが、夏は毎日笑顔でそれを受け取ってくれる。本当に、心から嬉しそうに。

若干邪魔そうに。

「今日は何やる？」

「えーっと、数学かな？ 苦手だし」

「そうね。でも、数学が苦手って言うのは間違いよ。数学『も』でしょ？」

「失礼すぎる！」

「あ、失礼だったわね。保健『は』得意だったわ」

「不名誉すぎる！」

いつも通りのやりとり。

そんな事をしながら、勉強は進んでゆく。夏の頭もかなりよくなり、センター試験での結果も期待できそうだ。もしかしたら、浪人

無しで防衛大に入れるかもしれないと言う勢いだ。

「ねえ、そう言えばパイロットになりたいって言ってなかった？
それはやめちゃったの？」

「うーん、色々調べると、女の子には難しいみたい」

「そりゃ、女の『子』には難しいわ」

「上げ足が鋭すぎる！ そうじゃなくて、女性には難しいの！」

「でも、ずっと女の子な夏には無理よ」

「存在の上げ足とられた!？」

「あ、でもきつとなれるわよ？」

理緒は夏の目をジッと見つめ、今までにない程の綺麗な笑みを浮かべた。

まるで、母親が生まれたばかりの我が子に笑いかけるような。

「え？」

「神風特攻隊に」

「死ねと!？」

「いーえ。自由な空へ羽ばたいてって意味よ、ね？」

その理緒の優しげな笑みに、夏は少し感動した。が、続いたこんな言葉で泣きだした。

「千の風になって」

「結果が最初と変わらない！」

理緒はベットに座り、差し含む夏の背中に手を回して抱きしめた。
ギョっと、温かく。

そして温かい言葉を掛ける。

「よしよし、誰に虐められるの？」

「理緒ですから！ 何自分は関係ないみたいに対応してるの！？」

確かに子供にかける言葉としては温かいが、やった本人が言うと酷い言葉に聞こえるから不思議だ。

「あ、そこ間違ってるわよ？」

「わたしの顔指さして言わないで！ ブサイクってことですか！？」

実際、夏は可愛らしかった。

美人とはとても言えないが、可愛らしい。身長的に美人はあり得ない。

どっちかと言うと、理緒の方に相応しい言葉だろう。

「あ、夏のブラ、サラシみたいね」

「いつ取ったんですか！？ 着替え見ないで！」

「なんてこと……蛙パジャマなんて初めてみた」

「お母さんが持ってきたの！ 一回も着てないもん！」

理緒はベットの下に在った蛙パジャマを取り出し、顔に押し付けた。

「着たわね」

「なんかバレた！ 一回しか着てないのに！」

「四回」

「嗅覚敏感すぎるよ！ 当たってるのが怖い！ ゲホ、ゴホッ……

はあはあ、もっつ

理緒は思う。

興奮させすぎた。

ずっと病院じゃ暇だろうと思って笑わせようとしてたけど、興奮して咳が酷くなってしまった。

理緒はベットの上の折り紙を集め、千羽たまるまで集める用のダンボールに入れた。

「今日は帰るわね」

「もう？」

「これ以上居ると治らないから、ね」

「わかった。また明日来れる？」

「ええ、来れるわよ」

「また明日！ ばいばい！」

「またね。優も行くわよ。明日は優が勉強当番だから」

「またな」

「優もばいばい！」

理緒は出口に向かったが、途中で夏を振りかえった。

夏は笑顔で手を振っているが、なんだか寂しそうだった。

理緒は一度戻り、夏の頭を抱きしめた。

そして、優しく頭を撫でる。

「どうしたの？」

「ん、また明日来るからね」

「うん！ でも、わたしにはないやわらかいものが顔に当たって痛い！」

「大丈夫よ。何れ夏もこうなるから」

「本当！？」

「ええ、胸筋が」

「結局そこに行きつくのが嫌過ぎる！」

今度こそ二人は外に出た。そして、外に出てすぐにメールが届いた。

『From如月夏 本文 一緒に防衛大に 』

本文を見た瞬間携帯を閉じ、二人は病院の外に出る。

冬休み

あれから、夏の風邪が治ることはなかった。そして、メールの返信の数も減って行った。

だから毎日病院に通っていたのだけれど、ある日、病室が個室に移ってしまった。

それも、面会謝絶。

理緒のメールに、風邪をこじらせて肺炎になってしまった事が書かれていた。でも、そこまで辛いものではないらしい。ただ、肺炎の中でも感染しやすいウイルスらしく、個室になったのだと。

だから、治るまでは夏自身が面会謝絶を申し出たとか。

たまに呼吸困難で苦しくなると言っていたが、今までもあったことなので大丈夫とか。

病院だからすぐに治療でき、問題はないらしい。

追記として、個室が千羽鶴でいっぱいになってしまったらしい。会えなくなつてからも家で折り、看護師さんに渡し続けていたからだ。軽い嫌がらせ状態だろう。

だが、理緒と優は本当に心配し、今回ばかりは嫌がらせ目的とかではなかった。効果があるとは思わないが、一面白い部屋では寂しいだろうから、色とりどりの折り紙で折っている。

毎日鶴と一緒に、手紙も渡していた。

メールじゃ読めないかもしれないので、出来ごとなどを書いて渡す。

看護師さんが毎日読んで聞かせているようで、読んでいる間は夏も笑っているそうだ。

早く治ればいいなあと、二人は真摯に思っていた。

せっかく勉強し始めたのに、出席日数上夏が留年することは決まってしまうている。

最初は二人も留年しようかとおもったが、それだと夏が気負いしてしまうので、毎日帰りに会いに行けばいいと思っっている。

終わりの季節

この頃、理緒も優も無事大学合格を決めていた。しかも理緒は試

しに受けてみた東大理？という日本最難関にうかってしまった。文系クラスからである。

理緒は夏にも教えられるように、理系も勉強していたのだ。元々頭が良かったが、夏が退院した来年の事を考え、教えられるようにと勉強していたのだ。

しかし二人はそんなことよりも、夏と連絡が取れなくなってしまったのがつらかった。

メールは帰ってこないし、会えない。

でも、看護師さんは元気だと言っていたので、安心していた。元気ならば、会えなくてもいいと。また外に出れるようになったら、いくらでも会えると。

その日も、二人は鶴と手紙を持って病院に向かっていた。

毎日の日課。休日も含み、一日も欠かしたことがない日課。

受験の当日や前日、全ての日でも、だ。

「結局夏は受験できなかったわね」

「そうなー。来年かな」

「わたし達がタダで家庭教師をやってあげるわ」

そして、いつもの夏の部屋。

だが、部屋はかたづけられ、千羽鶴もなにも無くなっていた。

「あれ？」

「ふむ。もしかしたら、元気って言ってたし、一般病棟が退院したんじゃないか？」

「やっと治ったのね！ と言つか長すぎよ！ やつとからかえるわ」
「久々だから、楽しみだなあ」

そんな時、近くを仲が良くなった看護師が通りかかった。毎日この看護師が鶴と手紙を持って行ってくれたのだ。

そのお陰と言っちゃなんだが、本当に仲が良くなった。たまに一緒にご飯を食べたりする程の仲である。

何でも、理緒や優ほどお見舞いに来る人は此処に勤務してから初めてだとか。毎日鶴や手紙を持ってきているのだ。ほぼ全ての看護師や医師に顔を覚えられている。

「あ、看護師さん！ 夏の部屋って何処に移ったんですか？」

理緒はとりあえず部屋を聞いてみた。

最初に退院したことを聞いてしまうと、唯の部屋移動の場合落胆してしまう。だったら、最初に悪い方を聞こうと言う思慮だ。

看護師はコチラに気付き、近づいてきてくれた。

だが、いつも笑顔の看護師さんに、笑顔はなかった。

そんな看護師さんに、二人は首を傾げる。

「……ごめん、なさい」

少し涙ぐみ、看護師さんは謝って来た。

「え？ まだ面会謝絶なんですか？ ちょっと看護師さんから夏に言ってやってください。いつまで友達またせるんだーって」

そう言って、理緒と優は苦笑した。

一体どれだけこっちは心配してると思ってるんだ、と。

「ごめんね、ごめんなさい」

看護師さんは二人の気持ちもわかっていた。あれだけお見舞いに来るのだ、本当に友達を大切に思っている。そんな二人に、約束したとしても『嘘』をついてきた自分。だからこそ、余計に心苦しい。

その思いに、看護師さんは涙を流した。

「ずっと、嘘をついて来て　如月さんは……」

なんとなく、その言葉で二人は理解した。つまりそういうこと。

元気などではなかった。

何故元気で個室、そして面会謝絶。

個室　つまり、重大な病気じゃないか。

考えれば小学生だってわかる事、本当に簡単な答え。

「夏、は？」

「……順序が逆になっちゃったけど、肺炎の合併症で、インフルエンザに」

理緒も優も、自分が何処に立っているのかさえもわからなくなっ
た。

血の気が抜けるのが自身でもわかる程、頭がぼやっとしてくる。

「更に……麻疹のウイルス性脳炎」

感染するから部屋に入れない　そういうことだった。

つまり、肺炎だけじゃなかった。肺炎感染するウイルスもあるが、大体は感染しない。

だが、麻疹は違う。一度なっていれば抵抗力がつき大丈夫だが、もしなっていないければ、感染する。

しかも、合併症の麻疹のウイルス性脳炎　六分の一での死亡。最悪な偶然、悪い意味での奇跡。

死亡する可能性がある病気に複数かかるなど、一体どれほどの確立だろうか。

もちろん、夏の身体が弱い事から患ったのだが、あまりにも残酷すぎる。

そこまで考え、理緒は看護師に掴みかかった。後ろか優が抑えつけるが、理緒は止まらない。

「それで、夏は！　夏は何処に居るんですか！？」

看護師は目を伏せた。

そして、『ごめんなさい』と、もう一度呟く。

患者の情報を漏らすなど、バレたら看護師は免職ものだろう。

それでも、言わずには居られなかった。あれほど毎日通ってくれた、二人に。

その言葉を聞き、理緒は走りだした。

『どこに？』と言う質問には答えられない。

『どこかに』としか言いようがない。

理緒自身ですら何処に行こうとしているのか分からず、唯走った。がむしゃらに、何も考える事もなく走った。

他人など関係なく、叫び、涙を零しながら走った。

お別れ

あれから、理緒の記憶はなかった。

看護師と話してから、何をしたかも、何を食べたかもわからない。ただぼーっと、自室で天井を見つめていた。

目の周りには隈が出来ており、寝ていない事を物語っている。

そして、何故か今、理緒と優は葬式会場に来ていた。

いつ来たのかもわからないが、気付いたら居た。

日付は、看護師さんと話してから三日後。

眼前には、夏の笑っている写真が飾ってある。

理緒は隣の優に声を掛ける。

「ねえ、優。何で夏の写真が飾ってあるの？ 願書の写真、間違えてA3サイズで撮っちゃったのかしら」

「理緒……」

優は何も言えなかった。

部屋で茫然としていた理緒を連れて来たのも優だった。何も食べておらず、生きているのか死んでいるのかもわからなかった。

無理やり理緒をお風呂に入れ、着替えさせて連れて来たのだ。もし行かなければ、理緒は一生後悔する。それどころか、立ち直る事が出来ないだろう。

二人は参列の一番後ろに並び、花を一本ずつ持っている。そして、最後の理緒と優の番になった。

目の前には棺桶。

そして、棺桶には無数の折り紙の鶴が入っていた。そして、その上に横たわる……。

理緒は震える手で、横たわる夏の頬を撫でる。随分と痩せてしまっている夏。

その頬は、冷たくなっていた。まだ硬くはなっていないが、時間の問題。

「ねえ、夏。何で寝てるの？ ねえ、夏？ 化粧なんてしたことなかったのにしちゃって……ねえ、ねえ！ 夏！ 起きてよ！」

認めたくなかった。

認めてしまったら、夏がいなくなっちゃう様な気がして。だけど、認めないといけない。

夏が 亡くなったと。

ぼろぼろと、叫び続ける理緒の頬を伝う雫。

すすり泣くこともせず、恥も外聞もなく涕泣する。

居なくなってしまった。
そんな深い哀傷が理緒を襲う。

「夏……まだお医者さんになってないじゃない？ 勉強だって私が教えるのよ？ 来年こそはって。ヤだよ……これからも一緒につて」

理緒は横たえた理夏に抱きつき、抱き起こす。

その行為に、周りは何も言わなかった。

非常識など、誰が言えようか。

指摘する、その行為こそが非常識。

「あのね、私……毎日、毎日ひどいことばかり言ってたかも、だけど……全部、本心じゃ、なかったよ？ ……身長だって、胸だって、ちっちゃくて、いつも夏は、可愛かった。その声も、顔も、髪も、私にとっては宝物のようだった。だから、だからね ……」

理緒は顔を上げ、涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔で、夏を見つめた。

「大好き、だったよ！」

抱き締めるように、夏の顔を胸に抱きしめた。

いつかの病室でしたように、ギュッと。

部屋は二人しかないように、静まり返っていた。
すすり泣く声と、理緒の声だけが部屋にこだまする。

しばらく、理緒は涙に沈んでいた。

だが、やがて、ゆっくりと夏を横に寝かせた。

そして、頬を一度触ってから、離れる。

一羽の黄色い鶴を手にし。

夏が一番好きだと言った黄色の鶴。黄色い鶴だけは、夏が折った物だった。

「おやすみ、夏。そして　ありがとう」

理緒が出口へ向かうと、後ろから頬を涙で濡らした優が付いてくる。

理緒は涙を拭う事もせず、部屋を出てゆく。

「りっちゃん、優ちゃん」

出口の所で、一人の女性に呼び止められた。

夏の母親である女性。

その女性は、一冊の日記帳を差しだしてきた。

理緒は一度それに視線を落とし、女性を見つめる。

「これ、は？」

「夏の、日記帳」

わかっていた。

わかっていたが、それをどうして差しだすかがわからなかった。

母親にとつても、貴重な夏の遺品。しかも、感情が載っている物。

「夏がね、二人に渡してほしいって」

母親は少し際しそうだった。

ゆっくりと、理緒はそれを受け取る。

ピンク色のカバーの、子供っぽい日記帳。
四桁の鍵がついている日記帳。

「私には開けられないし、読むべきではないから。夏が渡したかったのは、貴女達だから、ね」

理緒はギュっと、受け取った日記帳を抱きしめ、お礼を言う。
そして、立ち去る。今は人がいっぱいいるからダメ。
その背中に、

「ありがとう、娘と、仲良くしてくれて。最後まで、夏はあなた達二人の話をしていたわ」

後ろからかかった声に、二人は振り返る。
そこには、涙を流し、頭を下げる女性の姿があった。
きっと、夏の母親の方が悲しいだろう。自分の娘が亡くなって。
それでも、毅然としているのは、すごいな……と二人は思った。

理緒と優も頭を下げ、その場から去ることにした。

火葬は親族だけで行うので、二人は参加出来ない。

そこから少し歩き、唐突に理緒が口を開く。

「ねえ、優」

「ん？」

「あそこ、行きましようか」

「……そう、だね」

多くは語らない。それでも、二人はどこか分かった。

夏が好きだったあの場所。

屋上

二人は久々に屋上に来ていた。

二人だけで来たのは初めての屋上。

夏が入院してからは、屋上には来なかったのだ。

理緒はフェンスによりかかり、眼下を眺めている。

「気持ちい風ね、夏」

そう言っつて、理緒は掌の上の黄色い鶴に語りかけた。

それを見た優は、心配そうな顔をしている。

「別におかしくなったわけじゃないわよ？ ただ、ね。私たちは居れなかったけど、この鶴はずっと夏を見守ってたわ。亡くなる瞬間まで、ずっと。そして、夏が折った鶴。私達が折った鶴は夏と一緒に。夏が折った鶴は私達と一緒に」

『なんだかロマンチック』でしょ？ と、理緒は振り向きながら言った。

そして、胸に抱きしめていた日記帳を見つめる。

「日記帳。そう言えば、絶対に見せなかったわよね、夏は」「
「そうだね。恥ずかしがってた」

二人はくすりと笑い、手に持った日記帳を注意深く見つめる。
やはり、鍵を開けないと無理。だが、何処にも番号は書いていなかった。

「鍵……優は番号知ってる？」

「いや。理緒は？」

「知らない」

『…………』

はぁー、と二人は大きくため息を吐いた。

夏はどこか抜けているのだ。これじゃ開けられない。

しかしそこで、理緒は日記帳に紙が挟まっている事に気がついた。
それを抜き取る。

「読んで言い？」

「うん」

理緒は意を決し、それを読む。

『暗号：理緒 優 わたし』

それだけが書かれていた。

そして、十秒後には日記帳の鍵を開けていた。

「……暗号でも何でもないわよ」

「出席番号並べただけだな。よく一発でわかった」

「単純で四桁なのを試してみたら開いたわ」

本当に単純な暗号だった。

だが、理緒と優以外に開けられないためとしたら、これはちゃんとした暗号である。

理緒はごくりと唾を飲み込み、ページをめくる。

キラメル色のページ。

二人はそれに、目を通す。

☐ 4月7日（火）

高校三年生になったので、今日から日記を書き始めてみるよ。長続きするかわからないけど。

今日は始業式だったの。それで、すごくいい事がありました！

ふふ、なんだと思いますか？ えーっとね、それは、理緒と優とまた同じ組になれましたー！ すごい偶然！ 三年連続だよ。神様にした一生のお祈りのおかげかも？ 一生のいのりが何回もあるけど。もし理緒が聞いたら一笑のお祈りとか言って笑われちゃいそうだから、絶対に日記は見せちゃダメだね。

あ、そういえば今日また理緒にからかわれた。

優はからかわないからいいね。あと、優は下級生の女の子に告白されてたよ。

でわ、また明日。

4月9日（木）

早速昨日書くの忘れちゃいました。

うん。仕方ないとおもうよ？ だつていきなり授業とか始まつたし。わたしてきには、学校が始まつて一か月くらいは自由時間がほしいよ。だんだんと馴らしていけばいいと思う。

そうすれば、理緒と優とずっと屋上で話していられるのに。

あ、今日屋上で進路希望の話したよ。

理緒と優はサラリーマンになるらしい。あんなに頭がいいのに、わたしへのあてつけかもしれないね。

それで、わたしが防衛医科大学に行きたいっていったら、笑つて来た。なんて失礼！ 今は……無理かもしれないけど、頑張れば行けるよきつと！

二人も誘つてみたけどダメだった。でも、諦めないで誘おう。

後、お医者さんになれたらビデオカメラ買つてくれるみたい。ほしいなあ、そうすれば三人の思い出を撮つて、おばあちゃんになった時とかに見て笑うんだ。そのためにも、防衛大学に誘おう。

もしダメでも、わたしがお医者さんになれば、理緒や優が病気になるっても治してあげられるもん。病気の苦しさはわたしが一番しつてるから、みんなみんな元気になればいいなあ。

それと、今日はまた理緒にかかわれたよ。

でわ、また明日』

そんな事が書かれていた。

表には出さない、夏の気持ち。

「……何がお金持ちになつてお菓子いっぱい買いたいよ。立派な理由あるじゃない。後、本当にからかわれたつて書いてあるし」「どこから告白されたのなんて見てたんだろっ、な」

更に日記を読み続けると、普段の理緒がずつとつづられていた。どうおもったとか、どうしたいとか、表に出さない事が全て。

7月7日（金）

書いているのは次の日だけど、楽しかったから書いてみます。

今日は理緒の家でパーティーでした。何でも、わたしのテスト結果がよかったパーティーだって。嬉しくてちょっとはしゃいじゃった。

でも、二人は一位と二位で、点数もわたしより全然よかった。なんだか憚られた気がする。

全然関係ないけど、理緒の胸が大きくて、ちぎってやろうかと思った。

いつか千切っちゃおう。

最近、あまり身体の調子が良くない。調子が良くないのはいつもなんだけど、咳が止まらない。理緒と優にはれると心配するから、出来るだけ我慢してるんだけど、興奮すると出ちゃう。とりあえず咽が痛いつて誤魔化してみたけど、信じているみたい。少し悪い気がするけど、心配させたくないもん。

あと、寝る時はベットで寝させてもらった。

優が抱きついて来て、なんだかちよっとお姉さん気分。抱きついてきてるのに、何故かわたしが顔を胸にうずめる形になったのは何だろう。

落ち付くからいいかな。

そして朝起きると、理緒が勉強していた。

理緒は起きたばかりって言ったけど、嘘。

だって、布団が寝る前と同じだった。それに、空気清浄機や加湿機が増えて、更に毛布も増えていた。

理緒の目の下の隈を見る限り、きつと寝てなかったんだと思う。お化粧なんていつもしてないでしょ？

誤魔化された振りしたけど、わたしは知ってるからね。ありがとう、理緒。理緒が優しい事は、わたしが知ってるよ。

後、この日も理緒にからかわれた。

また明日　じゃなくて明後日』

読んでから、二人はため息をついた。

夏は案外鋭かった。こちらの考えなど、全て知った上で知らない振りをしていた。

どっちが大人かと言えば、明らかに夏。

「鋭すぎるわね……」

「お姉さんって……無理だね」

『7月23日（水）

今日は通知表が帰って来て、皆で見せ合いつこした。結果は惨敗。

人生で一番いい成績だったんだけど、二人の頭がよすぎる。

あと忘れてたけど、優に五百円取られたままだった！　酷い！

あ、でも帰りにパフェ奢ってもらったからいいや。

それにしても、二人とも頭いいんだし、一緒に防衛大行ってくれないかなあ。

そうすればずっと一緒にいれるのになあ。

今日も理緒にからかわれたよ。

それにしても、咳が治らない。また入院することになるかもしれない。

風邪だけで入院しなきゃいけないこの身体が嫌。もっと走ったりできれば、理緒や優と色々な所に行けるのに。
今のままでも十分楽しいけどね。二人が居てくれれば、別にいいかな。

……

8月1日(木)

今日は理緒からメールが来た。

昨日病院に行ったら検査結果が風邪だったので、夏休み明けには治ると思う。

でも、治るまでは家から出れないからつまらない。

理緒のあそぼーってメールは嬉しかったけど、うつしちゃうかもしれないから、今はダメ。

全く、理緒はわたしがいないと何も出来ないんだから。少しは我慢を覚えるんだよ。

後、今日は理緒にからかわれなかったらつまらない。

……

9月13日(日)

暇ー暇ー。

毎日理緒と優が来てくれるけど、それ以外は暇ー。

風邪の治りが悪くて、入院することになってしまった。
めんどろだなあー。でも、仕方ないかなあ。

毎回理緒や優が色々な話をしてくれるのが、最近では唯一の楽しみ。後は、隣のおばあちゃんがお菓子をくれると嬉しい。

でも、この千羽鶴は邪魔になってきたよ。嬉しいけど、隣のおば

あちゃんの所にもはみ出でて。

どう考えてもわたしが入院する前から折っていたような量だもん。しかも、わたしの好きな黄色は作ってくれないの。なんでも、黄色だけは自分で作れって。そしたら、それを混ぜ合わせるって。その方が三人の思いが詰まった千羽鶴が出来るでしょう？ って理緒はいうけど、千羽鶴って患者も折る物なのかなあ？

暇だから折るけどさ。

そして千羽鶴より酷いのが、片眼がない招き猫。

怖すぎる！ 毎回看護師さんもお医者さんも引き攣った笑み浮かべてるし！ せっかくもらったから捨てられないし、仕方ないの！ わたしの予感だと、わざとこの薄気味悪いものを置いて行ってるね。これから離れたければ早く退院しろって言う事だと思う。毎日一個だから、入院が長ければどんどん増えてっちゃう。

なんだか呪い殺しそうな顔してる猫。

早く元気になって二人と遊びたいなあ。

今日も理緒にからかわれたよ。

……

12月24日(日)

今日はクリスマス。

世間は恋人ととかと一緒に過ごしてるんだろうなー、わたしは病室だけ。

どっちにしる恋人いないし。

理緒と優は今日も来てくれた。二人はモテるのに、恋人も作らないでわたしの所に来てくれる。嬉しいけど、悪いなあと。

今日来てくれたのは嬉しいんだけど、ダメ。

病室が個室にうつったから。移っちゃうし、こんなわたしの姿を二人に見せられない。

肺炎にかかっちゃった。

風邪で弱ってる所に肺炎……やだなあ。

咳がすごくて、苦しい。

面会謝絶になってるけど、理緒と優は毎日鶴と手紙をくれる。

この手紙の為に生きて来たーって感じになってるよ。

でも、やっぱりこんな姿は見せられない。

二人は受験があるんだし、心配させられない。

わたしは留年しちゃったから、来年こそ、ね。二人と一緒に卒業出来ないのはつらいなあ。

だから看護師さんをお願いしたんだ。

“わたしがどんなにつらくても、酷くなっても、二人には元気だと伝えてくださいって”

……

1月28日（水）

今日から日記は看護師さんに書いてもらってます。

ふらふらして、よくわからないです。

そのままわたしの言葉を書いてもらいます。

なんかインフルエンザにもなっちゃったみたい。苦しいです。

普通インフルエンザの合併症が肺炎なのに、逆……。

理緒と優に会いたいな……でも、会ったら移しちゃう。

看護師さんには嘘ついてもらってます。
ごめんね。

もしこのまま ……ううん。
わたしはお医者さんになるから頑張る。

嘘ついてごめんね、理緒、優。

……

2月16日(金)

そろそろ、理緒と優は試験かな。
頑張つてね、応援してるよ。

二人はわたしなんかと違って頭いいから絶対受かるよ。
わたしが治つて、二人が受かったら、三人で一緒に猫の目塗ろう。
200匹くらい居て怖いよ。
つて言つても、ほとんど見えないけど。

そういえば、麻疹にもかかっちゃったらしい。
予防接種つけたのになあ……なっちゃった。
もしこのまま脳の方の合併症が出ると、ダメらしいよ。
確率はすごく少ないらしいけど、なっちゃったらダメみたい。

ねえ、理緒、優。もしわたしがこのまま……ううん。なんでもな
い。

看護師さん、もう書けないと思うから、日記帳に鍵かけてもらっ
ていいですか？ 今まで、ありがとございました。
泣かないでください』

ページに涙の跡があり、きつと看護師さんが泣いていたのだ。

それ以降のページは白紙だった。

何も書かれていないページに、理緒の涙が零れ落ち、滲む。

何故看護師さんが嘘をついていたのかも、夏が何を考えていたのかも。

夏がどんなに伝わったかも 日記に書かれていた。

何故面会謝絶にしたかも……。

夏は最後の最後まで、理緒と優の事を考えていた。
迷惑になるからと、自分一人で抱えこんでいた。

その思いが、理緒と優の涙へ変わる。

とめどなく、溢れだす。

夏の思いが溢れだす。

後悔の涙が、滴った紙に皺を作り、歪ませる 心に皺を作り、
歪ませる。

声を抑えられず、叫ぶ

慟哭。

酷くなる前に、気付いて病院に行かせていけば。

寒い屋上に行かせる事がなければ。

夏の行動全てに注意出来ていれば。

そして 自分に合わなければ。

考えても仕方ない『もし』が脳裏に渦巻き、侵食する。

全て自分が悪いと言う感情へと変質する。

手が震え、トサリと、日記帳を落としてしまう。

そして気づく。

開いた最後のページ。

そこに、書かれたメッセージに。

滲む視界の中、二人は視線を落とす。

『こんにちわ。

これを書いているのは、12月初頭だよ。

そして、理緒と優がこれを見てると言うことは、わたしは死んじやったのか！。

もし違ったら、みなかったことにして！ いつもみたいにからかっ
つてくれてもいいけど！ 恥ずかしすぎる！

最近体調がどんどん悪くなって、なんとなくだけど、ダメかなっ
て思っちゃう。弱気にならないようにしてるけど、書いてても手が
震えるし、血とか吐き出しちゃってるし。死んじやうかもなって。

死んじやったって言うの前提で話すけど、えーっとな。

理緒と優には一年生の頃からずっと助けられてきたよね。身体の
弱いわたしだから、いつも二人は気を使ってくれて。申し訳なささ
と感謝の気持ちで、いつもいっぱいでした。

わたしが身体壊しても、本当に一日も来ない日はなくて、面会謝
絶中もずっと来てくれてるって看護師さんに教えてもらって。嬉し
さで夜とか、一人で泣いちゃったりしました。今までそんなに心配

されたことや大切に思われたことなかったから、嬉しくて。小学校とか中学校では、身体が弱いからって腫れもの様に扱われて。

でも、二人は心配しながらも、普通の人みたいに扱ってくれた。多分、初めての本当の友達　ううん、親友だと思えた。

だからこそ、ずっと一緒にいたかったなあ……。

防衛大学に行けば、最低でも六年は一緒に、寮だからずっと一緒に行きたかったんだけどな、やっぱり無理だったみたい。

身体が弱いわたしなんかが、人を助けるって無理だったのかな。もっともっといっぱい、三人での思いで、ほしかったなあ。

ねえ、わたしは二人にとって、ちゃんと親友になれたかな。重荷になって無かったかな？　それだけが心配。

あ、あと二人が泣いてないか心配かなー、泣きむしだもんねー。

……。

泣かないでね。

わたしは満足はしてないけど、後悔はしてないから。

もっとならで一緒にいたかったって事で満足はしてない。

でも、この三年間三人でいれたことは、何も後悔してない。

もう一回生まれ変わって、理緒と優に会わなければ長生きできるって言われても、わたしはもう一度会おうよ。

だって、理緒と優に会う前の15年間よりも、会った3年間のほうが大事だったから。一生分の幸せを三年間に凝縮したって思えば、納得出来るかも。

そして、この人生にも後悔はないです。

確かに身体は弱かったけど、そのお陰で二人に会えたなら、よかったよ。

だから 二人とも大好きだよ。

わたしは終わっちゃったけど、二人はこれからがあるから、後悔はしないで。

満足はしなくてもいいから、後悔はしないで。

わたしと会ったことや、わたしが死んじゃったこと。後悔にしないで。

そしてこれからの選択も、後悔にしないで。

二人が選んだ事だから、それは後悔じゃなくて追憶だよ。大切な追憶。

いつでも満足を目指して前に進んで、追憶は台座にして、上に昇って。

その台座に、少しでもわたしがなれたら嬉しいかな。

あと、二人なら受かっていると思うから、大学合格おめでとう。

そろそろ寝むくなって来たから、終わるね。

おやすみ、そして、さよなら』

読み終わり、二人はゆっくりと日記帳を閉じた。

もう夏の声も聞けない。

文字も読めない。

この手に在るのは、決められた追憶。

そして、それを 夏を台座にしろと夏は言っていた。

理緒は涙を拭い、立ち上がる。

長い黒髪をなびかせながら、決意を決めた。
満足に進むために、後悔は要らない。必要な追憶は此処にある。

「私 浪人するわ」

「ん、あたしも」

二人は迷いもなく、そう宣言した。

誰もが入りたいたろう大学。

東京大学、青山学院大学 二人はその合格を蹴る。

「夏の意志、受け継ぎたい。この思いがあるなら、それが満足。台座を得た上での満足」

「思い出、作ろうか。夏に見せてあげたい。満足な結果を」

理緒は右手で、優は左で、日記帳を掴む。

三人で手を繋いでいるような。

三人の夢を此処で誓う。

「さ、帰ってお母さんの説得ね。来年、防衛医科大学受けないと。勉強のしなおしよ」

「そうだね。あたしもだ」

二人は泣きはらした真っ赤な瞳で、コクリと頷く。
まっすぐに、お互いの瞳を見つめて。

その瞳には、ゆるぎない決意が、彩色を放っていた。

追憶の日記帳・りお@Rio様（後書き）

三年後

夏もまっただ中。

午後の講義が終わり、防衛医科大学の屋上に、理緒は一人で居た。

理緒と優は現在二期生。

浪人一年、無事に大学に受かったのだ。

元から頭がいいのに、過剰と言えるほどの勉強をし、悠々と合格した。

万が一にでも落ちることは出来ないと思いを。

そして現在、理緒は屋上でビデオカメラを持ち、セットしていた。

一週間に一回のビデオ撮影。

ベンチに向け、そこに日記帳と黄色い鶴を置き。

再生ボタンを押し、自分はベンチに座る。

「こんにちわ、夏。第七九回記録ね。えーっと、今日は屋上で撮る事にしたわ。きっと、夏と一緒に通ってたら此処が大好きな場所になっていただろうなって思っで。ちょっとまって、今見せるから」

そう言っで、理緒はビデオカメラを持ち、ゆっくりと、ぐるりと周囲を映す。

「今の季節は暑いわ。セミがうるさいし。そういえば、私が夏嫌い

って言ったら、夏は『わたしの季節が嫌いなのかー！』とか怒ってたわね。夏は嫌いだけど夏は大好きよ？ ややこしいけど。近況と云うか報告ね。まだ全然で、研修医にすらなれてないけどって当たり前だけど、順調にやってるわね。ま、夏みたいに彼氏いない歴〃年齢更新中だけど？ 今はそれより勉強かなあ。夏みたいな子を助けられるくらい頑張りたいわ。あと、実はね？ 結構羨ましかったりしたのよ？ 夏が将来の目標決めて、わたしはなあなあに生きてさ。色々からかってたけど、好意の裏返しみたいな。好きな子は虐めたくなる精神ね」

理緒はくすくすと笑い、カメラに自分の顔を近づけ、笑んだ。そして、ポケットからある物体を取り出し、カメラに近づける。

「夏の意志は継続中！ そして早くこの気味の悪い招き猫に目を書くの」

つんつんと招き猫をつつき、苦笑いを浮かべる。

理緒自身キモチワルイと思っているからだ。

この招き猫も、ずっと理緒の病室で、理緒を最後まで見守っていた招き猫。

この人形が自分だったらと、何度も思った。

同時に、夏の息を引きとる瞬間を見てしまったら、自分はどんなってしまったか と思ったか。

もちろん追憶であり、今の自分に後悔はしていないが。

「あとはー…」

そんな時、屋上のドアがガチャリと開く。

「理緒ー、そろそろ部屋戻らない？」

「優の登場です。手先が器用で私より優等生よ。どうぞー」

理緒は優にカメラを向け、笑顔を浮かべていた。

「え？ えーっと、夏の意志は継ぐから」

「さっき言ったわ」

「じゃあ、招き猫に」

「それも言った」

「あー、じゃあアレだ。なんだか千羽鶴作るのが趣味になった。と言っかな、なんだろう。勝手に暇な時手が動いちゃうな。それのおかげで大分手が器用になった。知らずして手先が器用に。これも夏のおかげかな」

「以上、優でしたー。では、また来週をお楽しみに。忘れちゃだめよ？ 夏はわすれっばいから心配ね。またね」

そう言っつて、理緒はビデオカメラを切った。

ベンチに戻り、日記帳と鶴を回収し、出口へ向かう。

「そついえば理緒、課題提出ちかいけど出来てる？」

「もちろん。貰った日の夜には終わらせたわ」

「さすが、優等生」

「勉のわたしと、技の優。最終的に必要なのは技だけど」

「理緒も他に比べれば技術もすごいけどな」

くすくすと笑い、二人は扉を開ける。

そんな時、サアアアアと、少し強い風が屋上を吹き抜けた。頬を撫でる温かい風に、理緒は振り向く。

『 ありがとう 』

なんとなく、そんな風に聞こえた気がした。
そう、本当なんとない幻聴。

だが、理緒は大きく息を吸い込み、

「こっちこそありがとう！」

叫んでから、パタパタと屋上を出てゆく。

「どうした？ いきなり叫んで」

「んー、気分よ。たまに気分で発狂したくなるでしょう？」

「精神科に行った方がいいな。ちょうど此処にあるから行ってみる
といい」

「辛辣！ 夏よー、夏がいなくなってから私がかかわれるわよ。
助けて」

けらけらと笑いながら、二人は階段を下りて行った。

仲良く、日記帳を二人で持ちながら。

そんな姿を見た人が、『 仲のいい “三人” だなー 』と呟いていた。

ここからあとがき

自分の思い出を投稿してみたいと思いつきました。

・登場人物

橘たちばな 理緒りお・・・自分

安藤 優・・・親友

如月 夏・・・体が弱い親友で話のきっかけになる人物？

・話の概要

これは自分が高校3年のときに、3年間一緒のクラスになった親友と将来について休み時間に話したことから始まります。

自分は最初は普通に大学を出てサラリーマンにでもなればいいと思っていて、登場人物の安藤も同じような考えをしてました。如月だけは自分は医者かパイロットになりたいと語っていました。ですが、進路を決める時期に近づくにつれ如月の体調がどんどん悪くなり入院することになります。自分と安藤はお見舞いに行き学校の話しなどをしたりしました。でも、とうとう如月の体が限界を向かえて亡くなってしまい、自分と安藤が如月の夢であった医者とパイロットを目指す話です。現在自分は医学部の2期生です。

大体こんな話ですがよろしく願います。

あとがき

皆さんも将来がどうなるかは少しのきっかけで変わるものなので覚えておいて貰いたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8213/>

追憶の物語

2010年10月10日15時31分発行